
文目も知らぬ恋

海野 真珠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

文目も知らぬ恋

【Nコード】

N6190J

【作者名】

海野 真珠

【あらすじ】

奥殿に迎えられた一人の美姫。帝をも凌ぐ高貴なる美姫は、最高権力者が唯一望んだ、世界の理の具現者だった。傾国を謳われる美姫を望んだ帝は、運命の齒車に組み込まれる。その齒車は、国の未来をも呑み込んだ。―――特殊なる一族である『鬼家』。その本家である鬼頭宗家の一の姫、蓮姫。当代の実姉にして、隠された姉姫。

唯一の至宝と呼ばれる蓮姫。蓮姫を望む、帝。忍び寄る、影の存在。守るべきは、唯一無二の、宝玉。

求められるのは、帝か、姫か、和子か。利用されているのは、帝か、姫か、和子か。

壱 淵瀬に溺る（前書き）

15禁程度の性描写があります。

ハーレムや大奥といった一夫多妻制の時代背景です。

近親相姦を含みます。

十分御注意ください。

壱 淵瀬に溺る

帝の住まう殿の最奥

奥殿とも禁殿とも呼ばれる奥居に、まさに傾国を謳うに相応しい美姫が入内した。

その美姫の噂は、表殿どころか城下にまで広がり、今一番の人々の関心事となっていた。

表殿朝見の間

帝が入る前の独特のざわめきの中、参内している公卿や左官たちの話題は、もっぱら最近入内した美姫の事であった。

入内してまだ五日程であるにしても、地位ある公卿たちの話題としては些か逸しすぎている。

「聞いたか？ あの話」

「ああ、先日入内した姫君だろうか？ なんでも、帝が再三要求してやっとだったらしい」

年若い左官たちの話に、公卿の後継も加わる。

「父が言っていましたが大層美しい姫君であられるとか・・・それに、鬼頭宗家の正当な流れのお血筋で、やんごとなきお生まれのお方とか」

「鬼頭宗家筋って・・・名門も名門じゃないか。なのに、なんで入内が今なんだ？」

鬼頭宗家。

皇帝と同格、もしくはそれ以上の歴史と権力を持ちながら、決して政治の表舞台には出ず、陰陽の様々な力でもって世の理を管理する一族の宗家。

そんな名門貴族以上の地位の流れを汲む姫君の入内が噂程度にしか広まらず、内々の秘密裏に行われたとあっては、よからぬ噂が出ても不思議ではない。

「参内だって無かったのだろう？」

佐官が公卿の後継に尋ねる。

武佐官よりは、身内が奥居に入っていることの多い公卿の方が詳しいのは当然だろう。

「ええ。参内は一度も無く、入内の話も前日まで誰一人として知ら

なかったそうです。

帝が強く望んでいる、とは周知だったのですが、父をはじめ他の公卿様方もご存知なかったそで・・・」

「奥居頭様もか？」

奥殿を取仕切る奥居頭ならば知っていただろう、と問えば

「いえ、奥居頭の水波様も、入内前日に帝からお聞きになったただけだったそうです。

それも、最奥の一部屋をすぐに使えるように、とだけ・・・」

奥の秘事なのだろう。声を潜めて言われたその事実には、奥向きには詳しくない佐官も目を剥いた。

「奥居の最奥って・・・」

「紅の間。

御正室様のお部屋です」

奥殿は表殿と違い、多くの小部屋が存在する。

その部屋部屋には、帝の正室や側室といった妻たちや、側女、侍女、女官と数多い女たちにあてられている。

その中でも紅の間と呼ばれる一角は、代々正帝妃、すなわち今上帝の正妃のみ住まうことの許された部屋であった。

「ばかな・・・ 紅の間は、既に御正室葵姫様がお住まいだろうか？」

年若い今上帝には、即位と同時に迎えた正室と、数人の側室がいる。

正貴族出身の正室、葵姫は、男の後継こそ産んでいないが、女の子を一人生んだ母である。

「ああ。菊姫様をお産みになったとき、二条の方様の呼称を賜ったばかりだろう？ まさか、降格・・・」

「そこまでは私も・・・ ただ、紅の間にお迎えになられたのは事実のようです。帝から直接何も無いので、奥はもちろん、公卿の方々も公にはなさりませんが・・・」

「正帝妃として迎えられたのなら、入内から五日も経っているのに何も無いとは考えられないが・・・」

そもそも、正室降格自体がありえないだろうか？」

「帝は一体何をお考えなのだか」

帝の御子を産んだ妃には、お方様の呼称が与えられる。
子を産んで、初めて妻として認められるのである。

いくら正室の地位にいても、お方様と呼ばれなければ意味は無く、格下の側室がお方様と呼ばれば、礼を取らねばならない。

奥殿で最も高位なのは、時期皇帝の母である。

「我々佐官は噂程度だが、公卿様たちはそうではあるまいに。貴公の御家も大変なのでは？」

一緒に噂話などしていいのか、と言外に問えば、若い後継は笑った。

「我が家には先代皇帝陛下の側室だった姉しか居りませんので、こうして皆様と談を交えておられます。しかし、今上帝の奥居に入内されている公卿様方は、帝に毎日説明を求めていらっしゃるそうですよ」

奥居も荒れそうですね、と言ったところで朝見の開始を知らせる鐘が鳴り、噂話はしばしの休憩となった。

式 時に熱かう

奥殿 紅の間

「姫様、城下も城内も、この奥殿の中ですら姫様の噂話でもちきりですわ。この部屋にすら、入れ替わり立ち代りで様子伺いが参りますのよ」

紺の内掛けを身に付けた女が、上座に座る主に言う。

女官であろうこの女は、さも楽しそげに、しかしどこか呆れているようである。

「もう五日になりましたように・・・皆様、よほどお暇であらしゃいますなあ」

上座の主はそう言って笑う。

紅の内掛けから覗く肌は透き通るほど白く、細い指先には形の良爪、上がり気味の瞳が印象的な顔も、万人が美しいと賞するだろうほど整っている。

艶やかな黒髪は柔らかなストレートで、結わずに梳き流しているため畳に扇を描き、身じろぐたびに衣とすれ、絹の光沢をかえす。

紅を引かなくとも紅い唇から発せられる声は軽やかで、まさに鈴の音の心地よさである。

「皆の噂も煩わしい・・・　いつそのこと、奥殿中を散歩なぞしましょうか」

「お散歩ですか。それもよろしゅうございましょう。ちょうど今、表殿は朝見の刻限にて公卿たちもおりますまい」

「姫様、行かれますか？」

紺の内掛けの女官に続き、緑の内掛けの女官が続ける。

外室してはいけない、と制限があるわけではない。この五日間出なかったのは、ただ見世物にまりたくなかっただけなのだ。

「そうさなあ。天気もよろしいし、庭になぞ出てみるのもよろしいか・・・　百合、牡丹、用意を」

手にしていた扇を下ろし、にっこりと笑って立ち上がれば、二人の女官は心得ているとばかりにつき従う。

「姫様、留守は式に任せておけばよろしゅうございますか？」

百合と呼ばれた紺の内掛けの女官が紙を片手に問う。

「入り口に封さえしておけばよろしい。わざわざ式など見せる必要もありません」

「では、封の印だけ結んでおきます。牡丹、姫様と先に」

「では、姫様・・・」

緑の内掛けの女官、牡丹が主の手を取り先導すれば、襖は音も無く開き、二人は外室した。

奥殿 大廊下

奥殿最奥に位置する紅の間から奥殿中央にある中庭に出るには、大廊下と呼ばれる主回廊を通らなければならない。

奥殿の主だった部屋を繋ぐそこは、いくら朝見の刻限とはいえ無人ではなかった。

「妾たちが通るのに道を譲らぬとは無礼であろうつ はよう其処を退けっつ」

静かな大廊下中に響くような尖った声。

奥に似合わないその声に、他の者たちも足を止める。

「譲るも譲らぬも、無礼なのは其方の方ではあらしゃいませんか？ わざわざ此方の目の前まで進まれたのはどちらかえ？ 広い廊下やありませんか。少し寄れば済むことですえ」

涼やかに響く百合の声。

臆することなく返されたそれに、激したのは最初の女官とは違う、まだ若い女官のほうだった。

「妾たちに無礼と言うか?! 妾たちは御正室、二条の方様付の女官ぞっ 立場を弁えよっっ」

投げられた激言に、百合の顔から笑みが消えた。

「ほお? たかが正貴族出の正室付ごときが、わたくしたちに立場と言うか? 弁えねばならぬのはその方等であらう?」

柔らかな声音の中に、刺すような鋭さがある百合の声に、圧倒された女官はなおも言い募る。

「たかが側室付の侍女が妾たちを愚弄するか?!」

「身分の卑しい者はよお吠えはりますなあ・・・」

その方等の言う立場なぞ所詮はここでの立場にすぎぬ。公的な身分で言うたら、礼を欠いた無礼な振る舞いは其方ですえ?

このお方をどう心得てますのや? 恐れ多くも、鬼頭宗家代七十二代御当主鬼彗様が実姉、蓮姫様であらしゃいます。本来ならば、身分卑しきその方等ごときが御尊顔を拝することなぞ叶わぬ程高貴なるお方。

あまつ、蓮姫様にむかって道を譲れなどとは・・・」

「百合、もうお止めなさい。よろしゅうおす」

十二分に棘のある言葉を止めたのは、鈴の音とまごう美しい声だ

った。

「姫様・・・」

「このような往来ではしたない。譲る譲らぬの話なら、こちらが反対へずればよろしいこと。そうやろう？」

そう、言うが早いか内掛けを翻し移動しようとする。

「お待ちくだされ!!」

翻した瞬間、静まり返っていた周囲から声がした。

「水波様」

声の主を認めると、其処にいた者たちが次々と膝を折り頭を垂れる。

「水波殿か・・・」

皆が平伏す中、百合の冷やかな声が響く。

と、水波と呼ばれた初老の女官は、蓮姫たちの前で深々と三つ指を着いた。

下がった者たちの間にざわめきが起こる。

「蓮姫様・・・いえ、芙蓉のお方様。」

高貴なる貴女様が下賤の者にお譲りになどなってはなりません。下々の者にまでお方様のこと、知らせなんだはこの水波の落ち度にございます。誠に申し訳ございませぬ」

「水波殿。落ち度で済むことではありませんえ？ 姫様に対する数々の無礼・・・ どう責任を取られるおつもりか。そなたの礼だけではすみませぬぞ」

百合の言葉に怒気が混じる。

「百合、おやめなされ。水波には何の落ち度もありません。帝から勅令も無い今の状態では、いくら奥居頭といえども勝手はできませんまいに。」

今回のこと、これで終いでよろしゅうおす。皆も、騒がせてすまなんだなあ」

蓮姫の声が場を収める。

「もったいのうお言葉でございます」

深々と頭を垂れる奥居頭の姿に、他の者たちも声も無く従った。

表殿 朝見の間

帝が入ってからの数分間は、公卿らの報告で終わる。

いつもは何事も無く終わるその数分間は、今日に限り荒れていた。

「陛下、今日こそは御説明いただきますぞ」

「陛下が内々に入内を済ませてから、もう五日でございます。そろそろ御説明いただきませんと、臣も納得いたしません」

帝の目前に陣取りキツイ口調で言うのは、初老前の公卿二人。

正室葵姫の実父西条卿と、第一側室梓姫の実父原木卿である。

普段はこのような公の場では対面を気にする公卿も、さすがに背に腹は代えれなくなってきたようである。

「西条様も大変だな。二条のお方様、紅の間から出されたんだって？
御正室様が御側室様と同格の部屋らしいじゃないか」

「ああ、原木様だって同じさ。梓姫様も御懷妊されて、お方様拝命も間近だっていうのにこの騒ぎだろう？　そのうえ、葵姫様、梓姫様の隣に降室したらしい」

有力公卿の行動に、左官たちの噂話のはじまる。

第一側室の隣に降室した正室と、お方様拝命間近に正室が隣に降室してきた第一側室。

どちらがより哀れであろうか。

「芙蓉の方の話か・・・　そうよのう。そろそろ目見えねばと思うとった。明日の朝見に連れてこようぞ」

年若い帝の声に、部屋中が静まりかえる。

「芙蓉の方・・・？ 陛下！！」

「何や？ 説明も目見えも明日や。今日は解散。皆、ご苦労やった」

物言いたげな公卿たちを残し、本日の朝見は帝の一言によって終了した。

「原木殿・・・ いかがされる」

正室二条の方の父、西条卿が口を開く。

「奥居へ・・・ 梓の所へ行きます・・・」

覇気の無い二人の公卿は、連れ立って部屋を後にした。

参 淡に弾ける

奥居 中庭

「姫様、御当主様の式にございます」

「鬼彗のかえ？ 珍しいなあ。これへ」

中庭の池の前で水面を眺めていた蓮姫に、一枚の紙人形を手にした牡丹が声をかけた。

蓮姫の手に渡ると、紙人形は音も無く四散した。

代わりに現れたのは、一羽の小鳥。青色のその小鳥は、蓮姫の手の内で音を紡ぎ出した。

「姉上、お久しゅうございます」

「鬼彗・・・ まあ、手の込んだことを・・・
どうされましたのや？ 直接のお声とは珍しい・・・」

青色の小鳥から紡がれたのは、鬼彗の声であった。
傍から見れば奇妙な奇妙な光景だが、蓮姫たちは驚く様子も無く
当然のように会話をしている。

「帝から文をいただきましたので、御報告をと思ひまして。入内の
礼と、姉上の位についてでしたが、御存知でしたか？」

「いいえ、何も・・・宗家に知らせがいったのなら、こちらにもありますやろ。そう急く事でもありやしませんし、何ぞあったら知らせましょう」

自身のことにもかかわらず、まったく興味の無さそうな蓮姫。

「もう五日でございます。いくら理の流れのうちとはいえ、姉上のお立場が公になるまでにこれほどの時間がかかろうとは・・・何も、ご不自由ございませんでしたか？」

「御心配には及びませぬ。わたくしの立場、定められた事ゆえ何の憂いもありやしません。それに、宗家の降嫁など、時間がかかって当然ですえ？」

自身の心配をする弟に、ころころと笑う蓮姫。

「それでも、いくら私の結界内とはいえ、私の目の届かぬ処へ行かれた姉上が心配なのです。

何かと不自由もございましょう。姉上、この式をお持ちください。私と姉上を繋ぐ式となりましょう」

「ありがたく・・・名は？」

「姉上がお名付けください。名はこの式を縛る鎖となり、力を宿す呪となり、私の代わりに姉上を傍でお守りいたしましょう」

深い愛情を湛えた鬼髯の聲が小鳥から紡がれれば、一層美しく微笑む蓮姫。

そこにあるのは、姉弟愛以上の・・・

「では、青玉、と」

蓮姫が名を呼ぶと、小鳥はピィっと一鳴きし、それきり鬼桰の声を紡ぐことはなかった。

「御当代様のお言葉通り、ついに帝より勅令が出たようですなあ」

騒がしくなった奥殿を見て、百合が笑う。

「ほんに騒がしなあ。姫様、今奥へ戻られますと、色々煩わしいかと。いかがなさいますか？」

奥殿の煩わしさはごめんだと牡丹も蓮姫に言う。

「そうさなあ。公卿たちの目えも煩わしいし、女官たちの噂話も邪魔くさい。何ぞあれば誰ぞ呼びに来ますやろう。それまで、こうして自然の中に居るのもよろしい・・・」

楽しげな蓮姫の言葉に、百合も牡丹も依存はないとばかりに笑う。

「しかし、狭いお庭ですなあ。宗家の中庭とはえらい違い。奥殿も小さいし、息が詰まりそうですえ」

くるりと庭を見回して、牡丹が言う。

「紅の間あかて、最初はあまりの狭さに愕然としましたえ。宗家女官の部屋ほどしかありませんし、あれが正帝妃のお部屋とは、何の冗談かと思いましたわ」

紅の間を思い出して、百合も顔をしかめる。

「宗家の館が特別ですよ。帝殿にそこまで望んではあきしませんやろ。何もかも承知で来たんはわたくしたち。早う慣れなあきませんなあ」

ころころと笑う蓮姫に、二人は苦笑を返す。

宗家の館では、紅の間の数倍の部屋に住んでいた蓮姫。鬼彗の言うように、少しの不自由も感じてほしくはないのだが、こればかりはいたしかた無いだろう。

穏やかな雰囲気破るように、蓮姫の肩に止まる青玉が鳴き声を上げた。

「姫様・・・」

百合も牡丹も何事か感じたのか、そっと蓮姫に寄り添う。

連姫はその顔に微笑を浮かべ、後方の木陰をみつめた。

「まあ、このような所で噂の姫君にお会いできるとは・・・」

木陰から現れたのは、鮮やかな黄檗色の内掛けの女と、その女の女官であろう黄枯茶や栗皮茶の内掛けの女たち。

先ほどの大廊下での一件を知らないのか、慇懃無礼に蓮姫に口を利く。

「第七側室の静と申します。正室二条の方、第一側室梓姫に続き、帝より多くの寵を頂くもの・・・」

ちらりと蓮姫を見、帝の寵姫であることを笠に高位の正室や第一側室までもを下す物言いの静姫に、静姫の女官は顔色を変えた。

どうやら、大廊下での一件を知らないわけではなさそうだ。

知っていてなお、静姫をここまで駆り立てたのは自身の身分にあった。

正室葵姫や、第一側室梓姫のように、実家が有力貴族ではなく、高家の生まれでもない。

地方領主の一の姫にすぎない身で入内し、やっと掴んだ寵姫という幸運。

田舎者よと馬鹿にしてきた他の側室たちが、帝の寵を頂いたその時から態度を変えた。

美しさには自信があった。奥殿中の女の、誰にも負けない自信があった。

しかし、このたび帝が内々に迎えた姫君は、傾国の美しさと帝をも凌ぐ身分だと噂が広まった。

美しさ以外に何も持たない静姫は、大廊下での一件を聞き、止める女官を無視してここまでやってきたのだ。

「御寵姫様ともあろう方がそのような口の利きよう・・・身分卑しきものと御自身で触れ回っているようなもの。お改めなさいませ」

静かに響く百合の声。

「無礼者！！ 妾は帝の寵姫。いくら紅の間に迎えられたといっても、立場は妾の方が上ぞ！！ この奥殿で最も高位なのは帝の寵を多く頂く者。いくら身分があろうともここでは何の役には立ちませぬ」

百合の言葉に激昂し、声高に言い募る静姫。

自身が名乗ったにもかかわらず、微笑を浮かべたまま名乗らない蓮姫にも腹が立っていた。

その顔は美しく、ただそこに佇んでいるだけなのに目が離せない。

「帝の寵にしかすがれぬ哀れな女よ・・・そなたがいくら寵姫といっても、子もおらぬただの女にすぎぬ。我が姫様に無礼を働く下賤者・・・」

冷ややかな百合の声。声こそ発しないが、牡丹の目も、まるで無

機物を見るように温度が感じられない。

「静姫様、帝がお越しです・・・」

中庭へと降りる廊下を見て、静姫の女官が声をかける。

そちらに目をやれば、奥居頭の水波を連れた帝が、下履きに足を下ろすところだった。

怒りで顔を歪めていた静姫の顔が華やぐ。

「帝よりの勅令が出た様子・・・ 御自身の身が可愛ければ、即刻この場を立ち去りなさい。私たちからそなたの無礼を報告はしません」

百合の最後通告。

大人しく従っていれば、奥殿で側室としてこの先も暮らしていただろう。

「なぜ寵姫である妾が去らねばならぬ？ 去るならばその方等じゃ」

まっすぐこちらへ向かってくる帝を見つめ、自身の優勢を疑わない静姫に、百合は溜息をついた。

「蓮姫殿・・・ いや、芙蓉の方。会いたかったぞ」

白の直衣に身を包んだ年若い今上帝。帝が人目も憚らず抱きとめたのは、寵姫静姫ではなく、蓮姫だった。

「帝・・・？」

その顔色は白く、信じられないといった様子の静姫。

「静か・・・なぜ芙蓉の方と一緒に居る？　まさか、芙蓉の方に無礼をはたらいたのではあるまいな・・・」

「無礼・・・？　無礼なのはその姫。帝の寵姫である妾に一切の礼を取らず、暴言の女官を咎めもせず・・・そのうえ今は帝の腕に囲われて・・・」

何故でございます？　帝の寵姫はこの静のはず。

帝の腕に囲われるのはこの静なのです！！」

唯一の拠所であったはずの帝に向けられた冷たい眼差しに、静姫は耐えられなかった。

手に持っていた扇を蓮姫に向かって振り上げる。

「やめよっ！！」

帝の声と、静姫の女官の悲鳴と、ぱあんと、何かが弾ける音が重なる。

「我が姫様に仇なす者、宗家総力を注ぎ排除いたします」

「ここは御当代様の結界内。帝であっても姫様に傷つけること叶いません」

凜とした百合と牡丹の声に顔を上げれば、砕かれた扇の残骸の中に抑えられる静姫の姿。

「水波、左官たちをこれへ。正帝妃に仇なした罪人を捕らえさせよ」

帝の言葉に慌てて佐官を呼び寄せる水波。

百合と牡丹によって抑えられた静姫と、事の成り行きをただ見ていた女官たちは、左官たちに連れて行かれた。

このまま、静姫が奥殿に戻ることはないだろう。

「芙蓉の方、許されよ。何者にも代え難いそなたを危険にさらした・

・

御当代殿の結界が無ければ、尊いそなたに傷が付いたやも知れぬ・

・
・」

腕に囲った蓮姫を一層強く抱きしめ、帝が言う。

「百合、牡丹・・・そなたたちにも謝らねばならぬ。すまなかった」

静かに控える二人に、帝が声をかける。

「白陽様・・・ 帝が女官に謝罪なぞしてはなりません。百合も牡丹も鬼頭の女官にて、わたくしを守るは当然のこと。ようやくたとお褒めくださいませ」

帝の腕の中、傾国の笑みで見上げた蓮姫に、帝は対抗する術を持たなかった。

肆 火影と消ゆ

奥居 大広間

正面、上座に座位する帝。

向かって左、廊下側に座する二人の姫君と、右側、奥上座に座する一人の姫君。

下座に並ぶ他の姫や女官たちは、その座位に驚きを隠せないでいた。

帝よりも上座に座するなど、本来ならばありえない。

そのうえ、正室二条の方と第一側室の梓姫が同列に座するなど・

・
事の真意を確かめようと奥殿へやってきた両姫の父である公卿も、困惑を隠せないでいる。

「皆、面を上げるがよい」

帝の言に従い、顔を上げた者たちが息を呑んだ。

奥座位に座るのは、真紅の内掛けを纏った“傾城”。

淡く微笑むその姿に、その場の時が止まる。

破ったのは、帝の声。

「皆も知っての通り、梓が懷妊しておる。

本来ならば、和子出産後の呼称贈名になるが、臨月も近く、安定もし、出産に何の心配も無いとの事。

よって、梓。そなたに夕木の方の呼称を与えようぞ」

帝直々の拝命。勅令による書面での拝命が多い中、梓姫は皆の前で直々に呼称を賜り、声も無く深々と頭をさげた。

梓姫の父、原木卿の顔にも歓喜が浮かんでいる。直々の拝命など、それほど帝の寵愛されている証であると。

「さて。最近、奥殿中が騒がしく、皆にも心配をかけた」

ざわりとざわめきが起り、奥座位の美姫に注目が集まる。

帝は満足気にそれを見やり、

「こちらに座するは、鬼頭宗家が御当代、鬼彗殿の実姉、蓮姫殿である。予が再三入内を望んでいたのは皆も知っておろう。

先日、念願叶い、正帝妃としてお迎えできた」

帝が蓮姫を尊び話す姿に、皆、言葉も無く聞き入る。

「予の正妃として、この国の正帝妃としてお迎えするのが鬼頭宗家に対する礼である。」

この国の政は帝である予に権限があるが、理は鬼頭宗家のもの。この国の頂点に立つのは、帝である予ではなく、宗家御当代殿である。その実姉である蓮姫殿が予の元へ降嫁してくださったのは、何事にも代え難い喜びである。

よって、奥殿はもちろん、表殿の公卿をはじめ殿上人も総じて、蓮姫殿・・・

芙蓉の方に礼を欠く事罷り通さん」

帝よりも地位が上だと、帝自らが公言し、正帝妃の位を降嫁だという。

宗家当代の実姉ならば、この世界の何者であっても、蓮姫に指示できる存在は居ないということになる。

「では、葵の・・・二条の方のお立場は?！」

正室二条の方の父、西条卿が声を上げる。

その顔色は白く、娘の降格を信じられないと目が語っている。

「二条の方は正室に変わりは無い。正室に迎え、呼称を贈名はしたが、帝妃に立后させた記憶は無い」

はつきりと帝に言われ、西条卿は叩頭する。

本来、正室とは側室の中の最も高位の者の位にすぎず、正式には帝妃ではない。

帝妃とは正帝妃ただ一人を指し、唯一の帝の妃の位である。

歴代皇帝のほとんどは正室をそのまま帝妃に立后させているが、何人かは別に正妃を迎えている。

「明日の朝見の席へ、芙蓉の方の同席を賜る。西条も原木も、皆に伝えおけ」

「御意」

二人の公卿の意を受けたところで、帝は蓮姫の手を取り、大広間を後にした。

残された者たちは一言も発することなく、上座の二人のお方様をただ見つめていた。

「梓姫様・・・いえ、夕木の方様、お体に障りましょう。二条の方様も、菊姫様がお待ちです。お部屋へ・・・」

水波の一言で我に帰った二人のお方様は、女官を伴い大広間を後

にした。

「皆もはよう戻りや」

水波の解散で通常に動き出した時間の中、西条卿と原木卿だけが残された。

「水波殿・・・そなたは、帝が望んでおられたのが御宗家の一の姫様だと知っていたのか？」

「まさか・・・妾とて、芙蓉の方様入内後にその御身分をお聞きした次第・・・」

入内前日、帝より紅の間を空けよとの急なる御命令。二条の方様に降室いただき、芙蓉の方様入内の折、お方様自ら御紹介いただき・・・」

「どうしてその時すぐに知らせてもらえなんだ?! 噂の姫君が御当代様の姉姫様など、帝より御身分高き帝妃など、前代未聞ぞ?!」

今まで帝妃の父として殿内で権力を振るってきた西条卿。

立后はまだされていなくても、自身より高位の家には帝妃と成り得る姫は存在せず、梓姫の産む和子が姫であったなら、二条の方を立后させようと考えていた矢先の出来事に、半狂乱である。

「入内に付き添われた折、帝から芙蓉の方様の御身分、他言無用との勅令を賜りました」

「帝自ら、芙蓉の方様の入内に付き添われたと？」

「はい。御自ら蓮姫様のお手を取られ、礼を尽くし、本日より、帝妃として傍に迎えられたこと、至上の喜びにて、この後は、芙蓉の方として末永く傍に居てほしい、と」

水波の口からでる入内当日の情景。

二条の方の入内の日も、夕木の方の入内の日も、帝の付き添いはおろか、出迎えも無かった。帝自らが望んだ入内ではなかったのが、当然であるが、二人の公卿にとっては面白くない。

「姉姫降嫁を、宗家御当代様が許されるなど・・・そもそも、御宗家に姫君がおられたなど、しらなんだに・・・」

困惑を上回る怒りの西条卿に、原木卿も水波も沈黙する。

今まで、宗家に姫が誕生しても、その降嫁先は鬼頭の分家であった。

決して表舞台には出ない鬼頭宗家が、皇家に降嫁という形で干渉するなど、今まで無かったことである。

「しかし西条殿。帝は既に勅令を出され、事態は動き出しております」

「左様・・・もはや周知の事にて、どうすることもできません。それに、帝は芙蓉の方様を、その御身分に関係なく寵愛されており

ます。先程も、第七側室の静姫様を一切の情けも無く罪人として捕えられました」

数刻前の中庭での出来事を、まだ知らなかった二人の公卿に知らせれば、二人はがくりと項垂れる。

「最近の寵姫ですら、もはや眼中に無いか・・・」

自身の娘よりも地位も身分も格下の側室だったが、帝の寵は群を抜いていた。

次のお方様は静姫だと誰もが噂し、羨望の的だった側室。

その寵姫を一切の情けなしで、まるで無関心に切り捨てたと聞い
ては、邪魔な寵姫が居なくなったことを喜ぶべきか、もはや自分の
娘では帝の寵を得ることは出来ぬと悲しむべきか・・・

「何であろうと、明日目見えとなれば、婚儀もせぬわけにはいくま
い・・・

水波殿、帝に良き日を占い、芙蓉のお方様入内の祝儀を行うと伝え
られよ」

「しかと」

「では、西条殿。婚儀の日取りはこちらで。占星師にすぐ占わせま
しょう」

「おお、任せたぞ原木殿。では、水波殿、頼みましたぞ」

慌しく、奥殿の時間は流れていった。

奥殿 紅の間

「白陽様・・・ 本日はえらい勝手をさせていただいて・・・
大廊下でのこと、既にお聞き及びと違いますか？」

百合も牡丹も下がらせた部屋の中、横になった帝の頭をその膝に乗せ、蓮姫が声をかける。

「二条の方付きの女官がそなたに無礼をはたらいたそうだな・・・
水波が謝罪に来た」

瞳を閉じたまま、苦虫を嚙んだように眉間にしわを寄せ、帝が言う。

「芙蓉の方・・・ 申し訳なかった。予がもっと早くにそなたのこと、皆に・・・」

愛する寵姫が、卑しき者に無礼をはたらかれた事実が、年若い帝を後悔の念に押しやる。

自分がもっと早くにその身分を公にしていれば、このようなことは起らなかった。

ほんの少しの憂いも感じさせたくはなつかた寵姫の身に起った、許しがたい侮辱に、後悔と同時に怒りが湧く。

「静のことも、不愉快な思いをさせた・・・

ほんの慰みに手を出したにすぎぬ女のために、至上のそなたを・・・」

帝の口に、蓮姫の細い指が当てられる。

「何もかも、もう過ぎた事ですえ・・・ 勝手したはわたくしです。白陽様がお気使いくださることはあられません」

ゆっくりと紡がれる蓮姫の声。

帝が目を開けば、そこには美しく微笑む寵姫の顔。

「愛している・・・」

静姫も、美しい女だった。

低い身分を差し引いても帝が寵を与えるほど、美しい姫だった。

しかし、一目蓮姫を見てしまえば、静姫など霞んでしまう。

何者にも代え難い美姫。

この国の帝という地位さえ捨ててしまえる、まさに傾国の美姫。

「白陽様・・・」

心地よい声音。

口元に当てられた、細くしなやかな指先。

頭の下、柔らかい感触。

その全てに煽られる。

蓮姫という存在そのものに、欲情を刺激される。

「芙蓉・・・」

当てられた手を引き、朱い唇に口付け、抱きしめ、華奢な体を組み敷く。

はらりと舞う黒髪と、乱れた内掛けから覗く白い肌に誘われ、そのまま帝は欲に溺れた。

伍 募る思いと筆の海

表殿 朝見の間

帝の横に座する美姫に、集まった公卿や大臣、佐官にいたるまで、声を発することができなかった。

鮮やかな紅緋の内掛けにその身を包み、光沢のある黒髪を梳き流し、袖から覗く白く細い手には金糸雀色の扇が持たれている。

柔らかな笑みを浮かべる美しい顔は、天女の如きである。

「皆も既に存じておろう。

本日御臨席頂いたは、鬼頭宗家御当代が実姉、蓮姫殿である。この度、予の願いをお聞き入れくださり、正帝妃、芙蓉の方として降嫁してくだされた。

地位も身分もお生まれも、その身全てがやんごとなきお方である。皇帝である予よりも尊きお方にて、礼を欠く事罷り通さぬ」

帝自ら、自身よりも高位であると公言した勅令に、誰も逆らうことは許されない。

この国の女性の最高位である正帝妃の位ですら降嫁という蓮姫に、直接顔を見ることがすら叶わなくなってしまう。

「帝、ならびに正帝妃様に、臣を代表しお喜び申し上げます。して、正帝妃様御立後の婚儀でございますが・・・」

一斉に叩頭した殿上人のなかから、最前列の西条卿が声をあげる。
娘、二条の方付きの女官が芙蓉の方に無礼を働いたと水波から聞き、帝の不興を買う前に自身の株を上げようと必死である。

「良き日を占い、直ちに儀の準備に取り掛かりたいと・・・」

「そうよのう・・・ 婚儀をせぬわけにはいかぬからな。

直ちに良き日を占い、盛大なる婚儀を・・・」

「白陽様・・・」

帝の言葉に重ねるように発せられた声。
美しい声に、静まった場が注目する。

「芙蓉の方？」

「婚儀の日取りでございますが、鬼桰が占じさせていたきたいと・・・」
差し出がましいとは重々承知ではございますが、是非にと・・・」

柔らかに響く声音とともに軽く頭をさげ、帝に願い出る蓮姫。

「御当代殿が？」

「はい。本来らば公卿方のお役目ではございましょうが、わたくしの婚儀の日取りだけは、自身が占じたいと・・・」
西条卿、いかがでございましょう？」

「宗家御当代様のありがたきお申し出、どうして断れましようか。

ぜひ、お願い申し上げます」

蓮姫に直接声をかけられ、低頭する西条卿。

「鬼彗殿のお心、ありがたく頂戴しよう・・・」

帝の一言により、婚儀の日取りは鬼頭宗家に委ねられた。

宗家 星占の間

暗い闇の中、青白く光る球円の中央に、白藍の着物を着た少年が一人。

「帝から書状は受け取りました。婚儀の日取り、我が手に委ねてくださると・・・」

左手に水晶球を持ち、右手をかざし話しかける。

「鬼彗の願い通り、日取りは貴方に決めていただくことになりましたが・・・」

「どうされますの？ 貴方の出席、もはや決定事項ですえ？」

水晶から響くのは、蓮姫の声。

いつもの柔らかさはなく、どこか困惑気味である。

「御心配なさらずとも、姉上の御婚儀には参加させていただきます。鬼頭宗家当代、として・・・」

蓮姫の声とは対照的に、鬼桰の声はどこか楽しげだった。

「・・・わたくしの輿入れを祝うのですか・・・？」

「鬼頭宗家当代が実姉、蓮姫様のお輿入れを祝うのです。蓮華の輿入れではありませんよ」

悲しげな蓮姫の声に、笑いを含んだ鬼桰の声が重なる。

「・・・真名を呼ばれるのは、久しぶりなこと・・・」

「当然です。姉上の真名は、わたしのみ呼ぶことのできる特別なもの。

たとえ今上帝といえど、口にすることはできません。

蓮華は、唯一わたしの妻となる最愛の女」

愛しげにその名を口にする鬼桰。

さも楽しげに発せられた言葉に、いつもの柔らかさを取り戻した蓮姫の声が続く。

「滅多な事を・・・

姉は降嫁していきますのに、そのようなこと聞かれたら、理が外へ漏れてしまいませんか」

ころころと笑い否定せぬ蓮姫に、鬼桰の顔に喜色が浮かぶ。

「唯一無二の貴女を、たとえ理の流れとはいえ一時でも他の男の腕になど任せたくはないのですが・・・」

忌々しい、と言えば、

「わたくしかて同じですえ・・・」

しかし、それが理の定めなら従うが鬼頭の宿命。流れに任せて身を置くしかありません」

苦笑とともに聞こえる蓮姫の声に、鬼棼はただ沈黙を返す。

世に起こる全ての事柄は、理として定められている。

その具現者かつ管理者である鬼頭宗家は、ただ受け入れるのみである。

陸 後瀬の契り

奥殿 紅の間

朝見での目見えから数日。

牡丹も百合も、辟易としていた。

「姫様、何ですか？　ここ最近の来客の数は・・・」

「ほんに、目見えからこっち、どこぞの公卿や佐官、女官から側室、ひっきりなしに誰ぞかれぞきはる。一体どうしましたのや？」

疲労の色を隠そうともせず、百合と牡丹が言う。

先日、朝見の席で目見えを果たしてから、奥殿には数多くの人が出入りしていた。

自分の娘や孫が入内している者は娘や孫を連れ、そうでない者は女官を伴い、こぞって正帝妃芙蓉の方の元へ訪れていた。

目通りが叶わなくても、書状や献上品など、自身が正帝妃に礼を尽くしているという事実を作ろうと必死なのである。

寵姫である第七側室、静姫の一件もこの現状に多大なる影響を及ぼしている。

あれだけ帝に寵愛されていたにもかかわらず、何の感情もなく切り捨てられたとあっては、お手さえ付いていない名ばかりの側室など・・・ということらしい。

「大廊下で楯突いてきた二条の方付きの女官、暇を出されたそうですえ。何でも、西条卿が二条の方に御命じになったとか。西条卿と二条の方、双方より書状がきておりました」

牡丹が桐箱を差し出す。

「まあ、たかがあれぐらいでござ丁寧なこと・・・」

「たかがではございません。下賤の分際で数々の無礼・・・本来なら書状ではなく直接詫びに来るべきでしょうに」

百合の言葉に蓮姫が笑う。

「しかし姫様、連日こないに人がきなはったら、帝もきにされるんちがいますか？ いっそのこと、立入禁止にしていただいたらいかがです？」

よほど辟易しているのだろう。真剣に言う牡丹。

「そろそろこないに騒がしいのも落ち着きますやろ。こちらの身分を公的に明かしてしまいましたし、このぐらいの事は承知ですよ」

時間の問題だという蓮姫に苦笑を返すしかない。

「あれ、また誰ぞ来なはったようですえ。迎えてまいります」

リン、と静かに響く音に牡丹が立ち上がった。

「ほんに、これで終いにしていただきたいですなあ」

百合も氣付いていたらしく、大きなため息をひとつ。

座を正したところで、牡丹の声が響いた。

「蓮姫様、夕木の方様のお越しです」

するすると襖が開くと、そこには夕木の方と御付女官の姿があった。

「突然なる訪問のご無礼お許しください。第二側室粹と申します。芙蓉の方様にお目通り賜りたく参上いたしました」

叩頭したままの口上に、蓮姫も形式的な返答をかえす。

「わざわざのお越し、大変嬉しゅうございます。どうぞ、こちらへお越し下さい」

百合が手をかし、蓮姫の前まで促す。御付女官は、中へ入ることはできない。

「和子様がいらっしゃいますのに、わざわざお越しくださりありがとうございます。本来自ら、わたくしの方から伺わねばなりません」

「お心遣いありがとうございます。最近では少々動いたほうがこの子も嬉しいようで、ご無礼を承知でお伺いいたしました」

ゆったりとした仕草でお腹をさする夕木の方。

「大切な御身体、ご自愛くださいませ。和子様のご様子は？」

「元気にお腹を蹴っております。あまりに元気ゆえ、医師も男の子では、と」

今上帝に世継の男子はいない。

地位こそ第二側室だが実家は有力公卿であるし、自身の身分も奥居では上位にあたる夕木の方が男御子を産めば、その子が第一帝位継承権を持つことになる。

夕木の方が男御子を産めば、その後帝妃である蓮姫が男御子を産んだとしても第一位の帝位継承権を持つことはない。

「まあ、それは何と喜ばしい。和子様が男御子であらされたら、帝もさぞお喜びになれますでしょう」

正帝妃の地位よりも時期皇帝生母の地位のほうが上位になるため、夕木の方が奥居最高権力者となる。

にも拘わらず、蓮姫は祝言を述べる。

「元気で健やかなる和子様を御産み下さい」

「ありがとうございます・・・」

何の裏もなく柔らかく微笑む蓮姫に、夕木の方は当惑気味にそう述べるのが精一杯だった。

「御付女官の驚いた顔」

夕木の方が退室した部屋で、牡丹が思い出し笑いをする。

「そらそうでしょう。まさか、姫様に祝言頂けるとはおもわなんだから」

百合も面白げに言う。

「理の流れは早々変えることなぞできませんのや・・・ 夕木の方が世継を産んだら、理が狂う・・・」

静かに発せられた蓮姫の声に、百合が笑う。

「姫様が降嫁してきた理由も無くなってしまうすしなあ。夕木の方はぬか喜びになってしまいますなあ」

「それが理・・・ 終ぞ変らんことですよ」

静寂の中に響いた蓮姫の声は、帝の来訪を告げる鈴に音に四散した。

「夕木の方が御産みになった姫、椿、と拝命賜ったそうですえ。何でも、帝の中庭の寒椿が満花だったとか。帝自ら手折られた寒椿が姫の枕飾りになってると」

夕木の方の来訪より数週間後、産気づいた夕木の方は女御子を出産した。

夕木の方の実父である原木卿は、産まれたのが姫だと知りかなり落胆したらしい。

一の姫には正室二条の方が産んだ菊姫がその地位におり、家の格も西条卿のほうが上のため、権力的にも二番手にまわる。

これで夕木の方が世継の男御子を生んでいれば立場は逆転したのだが、世の中はそれほど上手くは回らない。

「まあ、御手ずから枕飾りを・・・さぞお喜びでございましょうに」

女官の噂話を聞いてきたらしい牡丹の報告に、百合が返す。

普通、帝が側室の産んだ子供を可愛がれば面白くないと激するのが正妃付きの女官なのだが・・・

百合も牡丹も、ただ噂話をする口ぶりである。

「姫様、夕木の方に祝書を送られたそうですね」
思い出したかのように牡丹が蓮姫に言う。

「ええ、ご出産あそばした時に・・・
わざわざ夕木の方の女官が報告にきはってなあ。そのまま持ち帰
ってもらいましたのや」

「牡丹、何ぞ誰かから？」

「さつき、廊下で水波殿にお会いして、その時に・・・
何でも、原木卿が大層お喜びになられて、水波殿を通して正式に
御礼をしたとか・・・ 後ほどお礼に伺う、と」

廊下での水波とのやり取りを伝えれば、蓮姫は苦笑し、百合は呆
れ顔だ。

「なんとまあ、わざわざ水波殿を通さんでもよろしかろうに・・・」

「せっかくの姫様からのご好意。原木卿も西条卿の二の舞はお嫌で
しょうからなあ」

けらけらと笑う牡丹に蓮姫は苦笑を濃くする。

「これ、そろそろ水波が来る頃やろう。めったなこと言うもんやあ
りません。どんな思惑があらうと、礼を尽くしてくださるは喜ばし
きこと。こちらもちやんと受けなあきませんえ」

奥居頭である水波を通すのは、公に蓮姫に礼を尽くしていると知
らしめる為であると言う二人に、蓮姫は承知している、と笑う。

権力者に礼を尽くすのは、いつの世も自身の保身をはかるのに有効な手段であることなど、自らが最高権力者である蓮姫には今更すぎることに違いない。

「噂をすれば・・・」

水波の来訪を告げる声に、百合と牡丹は表情を改めた。

漆 空音の君

空音の君

表殿 大広間

「鬼頭宗家当主、鬼彗にございます。此度は姉、蓮姫の輿入れ、誠に喜ばしく存じます。

降嫁していく姉のためとはいえ、帝権を無視に星占させて頂きましたこと御礼申し上げます」

今上帝と芙蓉の方の祝儀の宴。

賓客として招かれた鬼彗が祝言に訪れた。

祝宴に盛り上がる広間は騒々しく、誰一人鬼彗を気にかける者はいない。

「鬼彗殿。こちらからお礼をと思っておりました。

芙蓉の方の降嫁、御当代である鬼彗殿のご助力があったからこそ今日という良き日を迎えることができました。

感謝致しております」

表立った地位こそ公になっていないが、帝よりも多くの権限を持ち、政ですら理の中であるがゆえに見通すことの出来る宗家は、一

度公の場に出てしまえば帝ですら叩頭する地位を有している。

「宴もたけなわなれば、積もる話もございましょう。

芙蓉の方、鬼彗殿と奥殿へ下がられよ」

「ありがとうございます。お言葉に甘えさせていただき、下がらせていただきます・・・ 鬼彗」

すつと、鬼彗に手を差し伸ばす蓮姫。

その手をさも当然のように取り、引き寄せる鬼彗。

その行動は姉の手を取る弟という姿ではなく・・・

しかし、唯一の目撃者である帝も、何の疑問をもつことはなく。

広間に多くいる他の者たちの誰一人見咎めることなく。

芙蓉の方不在を誰も認識することなく宴は続く。

奥殿 紅の間

奥居の最奥、正帝妃の部屋から艶やかな嬉声が洩れる。

表殿では祝宴が続き、奥殿では静寂が保たれている。

そんな、有得ないはずの時間に、有得ない場所から聞こえる嬉声。

明朱の内掛けに広がる美しい黒髪。

朱の生地から除く肌は透けるように白く。

紅い唇から発せられる声は澄んでいる。

「蓮華・・・」

姉姫の白い肌に紅赤の華を散らしながら、弟は愛しげに姉姫の真名を呼ぶ。

快楽の中に身をおく姉姫も、愛しげに弟の頭をかき抱いた。

「あっ・・・あああっ」

一際高い嬉声が姉姫の唇から洩れ、部屋の中を濃密な空気が満たす。

「この子が、次期帝につきましよう・・・」

弟の手が姉姫の下腹部に触れる。

そこは、ちょうど子宮の真上あたり。

「それが理・・・わたくしと、貴方の子がこの国の次期帝」

弟の手に自分の手を重ね、姉姫は淫蜜に笑う。

たった今その行為を終えたばかりだというのに、そこに子が宿ったという。

それが、理だと。

「今宵、帝はここには来ない。一夜の夢と、理の中で過ぎましよう」

くつくつと笑う弟に、姉姫は至高の笑みで言う。
「入内してから、帝がわたくしを抱かなかった日はない・・・
今宵のことも覚えておらぬのならこの子は帝の子。
今上帝唯一の、帝位継承者となりましょう」

朝見の間

慣例の朝見の席は、普段見かけることのない公卿や武官、文官までもが揃い、一種独特の雰囲気の中にあつた。

朝見開始の鐘が鳴ると、その空気はより濃くなった。
最前列に座る公卿たちも、緊張した面持ちで帝の登場を待っていた。

上座の襖が開き、帝が参上する。

一斉に、下げられる頭。

帝がその座に着くと、皆が息を呑んだ。

白の直衣はいつも通りだが、そこには朱の刺繍が施されていたのだ。

柄は、双翼の鳥。

この国において、双翼の朱鳥は祝いの象徴である。
帝がその柄を纏うのは、世継誕生の折のみである。

「帝・・・」

最前列に座る西条卿が、その直衣を認めて声を上げた。
隣に座る原木卿も常より白い顔色だ。

「皆に目出度き知らせがある。

早くも耳にした者もおるようだが、正帝妃、芙蓉の方が懐妊した。
予の嫡子には菊姫と椿姫しかおらぬ。芙蓉の方が嫡男を身籠った今、
その身に多大なる価値ができた。その身を狙う者も出てこよう。危
険に晒すわけにはゆかぬ。

よって・・・芙蓉の方を、予の殿へ移す」

「東殿へ・・・」

帝の言葉を静かに聞いていた官たちの間に、ざわめきが起こる。

帝の居住殿である東殿は、表殿や奥殿と長い一本の廊下でのみ繋がっており、その廊下を封鎖してしまえば完全に外部とは孤立する。

立ち入れるのは帝とその乳母、第一帝位継承者とその乳母のみであり、それがたとえ帝妃や側室であっても例外は認められたことはない。

「東殿へ、入れられるなど・・・ 第一、まだ、ご嫡男かどうかすら・・・」

西条卿が異議を唱えるが、帝は聞き入れることはない。

自身の娘である二条の方懐妊の時、帝はその身を気遣うことはなかった。

夕木の方懷妊の時も、その身を氣遣うことはなかった。
それが、今回に限って・・・

「芙蓉の方は、次期皇帝を産む。これは、鬼頭家御当代殿の言である。」

先日、宗家より医師と御当代殿の祝書が遣わされた。

芙蓉の方すらしらなんだ懷妊、予に知らせたはその祝書。どうして疑うことがきようか・・・」

芙蓉の方自身すらまだ氣付かなかった懷妊を、宗家当代が先見とも取れる祝書でもって知らせたという。

それも、十月も先に産まれる嫡子が嫡男であると・・・
全てをその手の内に見通す宗家当代の言ならば、いくら帝であっても無視は出来ない。

それが、待ち望んだ世継のことであるならば当然だった。

「夕木の方はもちろん、二条の方にも懷妊の兆しなく、他の側室たちも同様。」

芙蓉の方の身、くれぐれもと御当代殿に頼まれておる」

だから、万全を取って東殿への移住を決めた、と。

「否は聞かぬ。これは決定事項である。」

移住は明日。それまで、何人の奥殿への参内を禁ずる」
勅令として決定されてしまえば臣下は諾を返す他なく。

「「御意に」」

臣下の承諾を確認すれば、帝はその場を後にする。

正帝妃芙蓉の方、懷妊

城下にまでこの吉事は瞬く間に広がった。

奥殿 紅の間

「それでは姉上、御身体、ご自愛ください」

青玉から流れる鬼彗の声に、蓮姫は微笑みながら返事をした。

「姫様、おめでとうございます」

鬼彗との会話を終えた蓮姫に、百合が声をかける。

「百合・・・ 何や変な気がしますわ・・・」

「あれ、次期様御懐妊やございませんか。いくら理の内とはいえ、お目出度いことですえ。」

帝もさぞお喜びであらしやるとか。東殿への移住も決まりだと知らせもありましたし、良き事続きですなあ」

ころころと笑う百合に、蓮姫も笑った。

傍から見れば、嫡男懐妊に浮かれている、と映るだろう。

正帝妃が男御子を産めば、その子は正統な帝位継承者となる。

先に側室腹の皇子が居たのでは少々厄介だったかもしれないが、今上帝の二人の子はどちらも皇女であるし、今懐妊しているのは芙蓉の方、蓮姫以外に居ない。

また、蓮姫が入内したその日から帝が他の女の寝所に入ったことなどなく、夜伽を命じられた女もない。

「帝がお越しにございます」

襖の奥から牡丹の声。

「お通し」

百合の声に襖が開き、叩頭する牡丹と奥居頭の水波、その後ろに帝の姿。

「芙蓉・・・」

「帝。このような時間に如何なされました？　まだ朝見の刻限でございましょう」

蓮姫の傍らに寄る帝に水波も続く。

「朝見は終わった。明日、東殿へ移居してもらおう・・・
輿を用意させるゆえ、不自由をかけるが許してくれ」

真摯に言われ、蓮姫は笑う。

「輿など・・・　ここから東殿の移動ではございませんか。自分で参りますので、そのようにお氣遣いくださいませと・・・」

唄うように言えば、否は水波からあがった。

「芙蓉のお方様、それはなりません。東殿に続く外廊は、この次期冷えます。大切なお体、万が一にも大事があつてはなりません」

「水波の申すとおり、その身、大切なればこそその配慮。無事に移居するまで心配でならぬ。予を安心させると思つて受けてくれぬか？」

そつとその身を包むように抱き留められ懇願されれば、それ以上何も言える筈もなく。

「帝・・・　そのようなこと、水波の前で申されては・・・
軽率なわたくしの方。申し訳ございません」

「では、芙蓉のお方様、明日、控えの間まで輿をご用意いたします」

る」

深々と叩頭し出て行く水波。これから、明日の手配をするのだらう。

「姫様、では、明日の移居の用意をしまいたします」

牡丹が声をかけ、出て行く。

「水波殿より身の回りのお品も一緒にといわれておりますゆえ、ま
とめてまいります。

帝、慌しく申し訳ございませぬが、御前失礼いたします」

叩頭し出て行く百合を見送り、帝が口を開く。

「そなたの女官はよう出来た女官やな。二条も夕木も、数十人の女官をつこうとるから、そなたがたった二人の女官だけで入内し時は驚いたが・・・」

二条の方は十八人、夕木の方は十七人の女官を使っている。

奥殿に仕える女官とは別に側室たちが実家から連れてきた女官で、それなりの地位にある者が多い。

自身の仕える側室の世話しかせず、個室を与えられている。

帝に見初められれば側室に上がることも可能なこの女たちは、その幸運を掴もうと必死である。

「わたくし一人の身の回りなど、二人でも多いぐらいや言います。常に一人は傍にと言われ、二人連れてきましたか・・・皆さん、そないに多く使われてますの・・・」

意外そうに蓮姫が言えば、帝は笑う。

「予も側で世話をさすは乳母である沢谷だけ・・・」

ああ、沢谷も予の乳母に上がる前は九鬼の名だったか・・・鬼頭の末席ときいたが？」

ころりと蓮姫の膝に横になり、下腹部に顔を寄せる。

子供のようなそれを、蓮姫は優しく包み込む。

「九鬼から乳母に上がったは、菖蒲と違いますか？」

「確か、そのような名だった・・・前帝、父上より沢谷の局の名を拝命するまでは、菖蒲と言っていた」

鬼頭分家、末席にあたる九鬼家は、昔から皇家との繋がりを持ってきた。それは側室であったり、女官であったり、乳母であったりと九鬼の女たちは何らかの形で皇家に仕えてきている。

「先の帝妃様の女官としてお仕えしていると宗家にも報告はありましたが・・・菖蒲が、白陽様の乳母でありましたか・・・」

ポツリと漏らされた蓮姫の言葉は、帝に届くことはなかった。

捌 はらり時雨る

はらり時雨る

奥殿 控えの間

移居の用意が整ったとの知らせを受け、蓮姫たちは紅の間の続きである控えの間に着いた。

衣装や小物、その他身の回りの品等は先に東殿に運ばれ、後は百合と蓮姫の二人だけである。

「百合、牡丹はどないしました？」

輿へ乗り込む際、姿の見えない牡丹を蓮姫が問う。

「牡丹は、お品とともに先に東殿へ今朝
百合の答えに軽く頷き輿へ乗り込む。

大事があつてはならぬ、との帝の言葉通り、普通では使うことのない輿へ乗り奥殿を後にする。

何者も、芙蓉の方の移居が終わるまで外室してはならないという先触れのため、しん、と静まり返った奥殿を進む。

大廊下を進み、中庭へと差し掛かったとき、ゆっくりと輿が停止した。

「どうか・・・？」

「姫様、帝がお越しです」

そっと扉を開け、百合が言う。

叩頭した百合の先には、帝が立っていた。

「まあ、帝・・・ このような所へ、共も付けず」

「芙蓉、よい。そのままに。外は冷えるゆえ、輿から出てはならぬ」

帝の姿を見、輿から出ようとすれば、その行動は帝によって止められた。

「芙蓉の移居、予も付き添おう思うてな。足を止めさせて悪かった。輿を」

帝が手ずから扉を閉め、出発の声をかける。

奥殿の内には、限られた者しか入れないため、今輿を担いでいるのもそれなりの身分の佐官である。

帝の寵愛を一身に受ける正帝妃を間近で見れるとあって、多数の立候補者から運よく選ばれた四人である。

帝自らが移居にわざわざ付き添うとあっては、明日にはこの事実が拡張され広まることだろう。

「帝、お待ち申しておりました」

奥殿を抜け、長い外廊を渡りきったところで掛けられる声。

「沢谷か・・・」

東殿唯一の入り口である扉の前で、落ち着いた紫の内掛けの女官が牡丹と共に待っていた。

ゆつくりと輿が下ろされ、帝の手によって扉が開かれる。

「芙蓉のお方様、お待ちしておりました。沢谷でございます。外廊はお寒うございますれば、内へ」

沢谷が開門、と声をかけ門番が開ける。

沢谷を先頭に、帝に手を取られた蓮姫が続き、百合が続く。最後に牡丹が入れば同時に扉は閉ざされ、白い壁と畳の廊下の東殿は、完全に外部から遮断された。

東殿 白雪の間

「姫様、お疲れではございませんか？」

東殿に入り、蓮姫が通されたのは帝の主寝室とは対面に位置する白雪の間であった。

本来ここは、第一帝位継承者、次期帝の部屋になるのだが、帝は「産まれてくる太子と共にここへ」と蓮姫に白雪の間を与えた。

暗に、和子出産後も東殿で暮らすことを望む言葉である。

本来太子、それも第一帝位継承者であれば、誕生より一月程で乳母へと預けられ、教育される。

母であるお方様はそのまま奥殿に留まるのが普通なのだが、帝は蓮姫も一緒に住むことを望んだ。

過去、例のないことである。

「わたくしは輿に乗っていただけやし、平気ですわ。しかし菖蒲、久しいなあ。鬼彗より聞いてはおりましたが、ほんにそなたが白陽様の乳母やとは」

帝が表殿へと戻り、白雪の間には乳母の沢谷の局と蓮姫たちだけになった。

腰を落ち着けたところで、蓮姫が笑う。

「わたくしも、先代御当代様に今は亡き阿利の方様の女官にと言われたときは驚きましたが・・・女官へ上がるとすぐに前帝より沢谷の局を拝命し、白陽様の乳母になり・・・

そこではじめて、御当代様をお継ぎあそばした鬼彗様に理の流れを聞き、今日が来るのを心待ちにしておりました」

「菖蒲は、鬼彗より理を？」

「はい、白陽様の求愛も、ご誕生あそばす和子様も、全て鬼彗様にこれより後は、この地気結界の中でお守りするようにと」

淀みなく言われる言葉に、蓮姫は嬉しそうに微笑む。

東殿を覆う、地気。

「鬼彗がこの結界を・・・お礼をせなあきませんなあ」

ころころと笑う蓮姫の声が、東殿に響いた。

蓮姫を東殿に送った後、芙蓉の方の移居を報告するため帝は奥殿の者たちを大広間に集めた。

「芙蓉の方、無事東殿へ移居した。二条の方、これよりまた紅の間に戻るがよい。不便をかけたな」

左前横に座る二条の方に声をかける。

紅の間に戻ることを許され、その顔に喜色が浮かぶ。

「帝、では、芙蓉のお方様は」

二条の方が諾を返す前に、水波が口を挟む。

芙蓉の方を迎えるために開けた紅の間を、もう一度二条の方に返してしまえば芙蓉の方の戻る部屋が無くなってしまおう。

「心配いらぬ。芙蓉の方は今後東殿より移ることはない」
はつきりとした帝の言葉に、異議を唱える者は無かった。

「では、女官を数人・・・」

「必要ない。芙蓉の方には、百合と牡丹がおる。沢谷もおる。他は必要ない」

水波が人手を申し出れば、それ也不需要ないという。

芙蓉の方以外の例外を認める気は無い、と。

諾を返す者たちを見、帝はその場を後にした。

「二条のお方様、すぐに紅の間へ移られますか？」

帝が去った広間で、水波が口を開く。

その声を切欠に、他の者も動きだす。

「帝のせつかくのお言葉です。戻りましょう」

隣に座る夕木の方に軽く頭を下げ、水波を連れて出て行った。

「私たちも戻りましょう」

女官を連れて、夕木の方も立ち上がる。

大広間に、静寂が戻った。

玖 雪にくるめく

玖 雪にくるめく

東殿 白雪の間

「乳母はいりません。せっかく和子と一緒に居られますのに、どうして他人の乳で育てなありませんのですか？」

わたくしは、和子は自分の乳で育てとうございます」

臨月も近くなった頃、帝から聞かされた話に蓮姫は珍しく言葉尻をきつくした。

次期帝出産前に、乳母を決めると言われたのだ。

「芙蓉・・・しかし、大変ではないか？」

皇家、公卿などの家では子が産まれれば実母ではなく乳母が乳をやり、教育するのが慣わしとなっている。

今上帝も乳母、沢谷の局に育てられたし、菊姫にも椿姫にも乳母がついている。

「鬼頭では、母が子を育てるのは当然とされておりますれば、わたくしも鬼彗も母の乳で育ちました。

わたくしに、和子に与える乳が十分に出なければその時考えますれば、何卒・・・」

暗に、乳母によって育てられるのは理に反しているといい、蓮姫は帝に懇願する。

寵姫に懇願されては否を返すことはできない。

「わかった。芙蓉がそこまで言うのであれば、乳母は捜すまい。しかし、決して無理はしてはならぬぞ」

和子は大切なれば、予は芙蓉こそ大切ゆえ、決して無理はならぬ。約束してくれるな？」

大きくなったお腹をゆつくりとさすりながら、帝は蓮姫に言う。

「ありがとうございます・・・」

撫でられている手に己の手を重ね、傾国の笑みで囁く。

「和子は嬉しいが、そなたに触れられぬのは苦痛じゃな・・・」
欲情の灯った瞳に苦笑を交えて帝が言う。

蓮姫が入内してから、帝は毎日欠かすことなく部屋へ通っている。それは、懐妊してから変わることはなく、身体こそつなぐことはないが、毎日同じ布団で眠るほどである。

おかげで、奥殿は帝不通の日々が続いている。

お方様の地位を持つ葵姫や梓姫はもちろん、懐妊していない御手付きの側室、御手さえ付いていない側室たちは毎日実家から、帝の不通を何とか打破せよと矢の催促を受けている。

もちろん、帝自身も公卿等から言われているが、こちらは悉く無視である。

「白陽様、最近はまったく奥殿へお渡りになられないとか。わたくしならば大丈夫ですよえ、他の方々の元へお通いくださいませ。このままでは、奥殿の意味がのうなってしまうす」

横になってお腹に耳を当てている帝の髪を梳きながら蓮姫が言う。

何でもない事の様に言う蓮姫に、焦ったのは帝の方だった。

「芙蓉？ そなたは、予に他の側室たちを抱きに行けと申すか？

予が毎夜そなたの元に通うのは嫌か？」

「そうではございません。わたくしが白陽様の元に嫁してきたとき、既に白陽様には数十人の側室と菊姫様と椿姫さまがいらっしゃいました。わたくしは、それを承知で嫁して参りました。

帝妃としてお迎えくださり、こうして和子まで授かり、今また白陽様を独占しては、他の方々に申し訳のうございます」

ゆっくりと紡がれる蓮姫の言葉に耳を傾けていた帝は、それでも納得できないと眉間に皺を寄せる。

「そなたから予に進言せよ、と申したのは誰や？ 水波か？ 西郷か？ 原木か？ それとも、他の公卿や佐官か？ まさか、沢谷ではあるまい」

蓮姫が懐妊し、東殿へ移居した後、奥殿に自分の娘や孫娘を入内させていた公卿や佐官は揃って安堵した。

これで、帝は自分の娘の元へ通う、と。

しかしながら、帝は奥殿へ立ち入ることすらせず、表殿と東殿を行き来するだけの生活になった。

奥殿立ち入りを催促する者のうち誰かが、元凶ともいえる蓮姫に進言を求めたとして、何ら不思議はない。

帝自身、それはよくわかっていた。

「そのようなこと・・・」

微笑し、言葉を濁す蓮姫に、帝は起こしていた体を再び横にする
と、ハッキリと言い切った。

「奥居には通わぬ。他の者も抱かぬ。

予が自ら望んだのは、そなたただ一人。他のものは皆、そなたを
得る前の唯の慰み者にすぎぬ。

心から欲したそなたを得た今、どうして他の者をこの手に抱くこ
とができるのか？　これから後、予の和子を産むのはそなた唯一
人だよ」

ソナタ以外、何者もいらぬ、と蓮姫の腹に顔を埋めるように言え
ば、蓮姫は唯困ったように帝の名を呼んだ。

「あれ、また帝はこちらへお越しですよ？」

部屋を外していた牡丹が自室に居る百合に問う。

百合は、蓮姫の側を決して離れたりしないはずなのだ。

いくら結界を張っていようと、蓮姫の身を守るのが百合の役目
であるため同室に居るのが本来であるはずなのだ。

例外は、こうして帝が蓮姫を独占しているときのみ。

「ええ、先刻から姫様の部屋に」

「こんな時間から、ようお越しですなあ。昨日、水波殿から書状が

届いたばかりですよ？ 姫様、どないしますのやろ？」

やや呆れ気味の百合に、さも楽しそうな牡丹。

昨日、奥居頭の水波から芙蓉の方に書状が届いた。

内容は、もちろん帝の奥居不通の件。

蓮姫がまだ奥殿に暮らしていた時は、帝は毎夜奥殿に渡っていた。もちろん、蓮姫の室で夜を明かしていたわけだが、それでも奥殿には足を向けていたことになる。

しかし、蓮姫が東殿へ移居してからは奥殿へ踏み入れることすらなくなった

朝、夕通して一度も足を向けることなく、まして他の側室の部屋で夜を明かすこともない。

芙蓉の方の元へ通う帝に偶然見初められる可能性も無くなったわけである。

それでは奥居中の女の、奥殿の意味すら無くなってしまおうと水波から書状が届いた。

芙蓉の方の言葉なら帝も聞き入れるだろうとのことだろうが、水波の奥居頭としての立場から考えると、苦肉の策だろうことが伺える。

「水波殿も大変ですなあ。側室の中には、姫様が帝の寵愛を一身に受けるは妖しの術のせいや言うものもおるとか。奥殿へ通われぬも、姫様が禁止しているせいやとか、ほんに色々噂になってはるみたい

ですえ」

今聞いてきた奥居の噂話を百合に聞かせる牡丹。

帝の通わなくなった奥殿は今、寵愛をその身に受ける芙蓉の方の悪い噂話で持ちきりのようだった。

「根も葉もない噂です。唯一望まれた姫様が憎くて仕方ないんですよ。

姫様の噂が帝の耳に入っていないとは思われへんし、そのうち落ち着きますやろ」

唯一愛する愛姫の悪口を見逃す帝ではないだろうと百合は笑う。

蓮姫の身分に気を遣っているとはいえ、帝の寵愛はそれを逸している。

「いくら姫様が言うたかて、帝が奥居へ通うことはありませんのになぁ。皆様何を勘違いされてますのか」

けらけらと笑う牡丹の声が部屋に響く。

「滅多な事を。」

そろそろ沢谷もきますやろ」

「帝がお越しなの、知ってはるんやろか？ 場所、移したほうがよろしいのとちやいます？」

「かまいませんやろ。沢谷も帝に進言せなあかんゆうてたし。ちようどよろしい」

蓮姫に書状が届いたように、乳母沢谷の局にも書状が届いていた。送り主は水波ではなく西郷卿からだったが、内容はやはり帝の不通い打破の相談。

西郷とは別に内々に原木卿からも書状が届き、こちらは椿姫の顔を見に来て欲しい、というものだった。

帝の第二子、夕木の方の産んだ椿姫は、そろそろ一歳の誕生日を迎える。

いくら帝の実子であろうと、姫であれば殿をあげた盛大な祝宴はせず、母の実家が奥殿の大広間で祝宴を催し、帝を招く。

それも、実家が有力貴族や高位の左官、または帝の寵厚き側室であればできるが、実家にそれだけの力がないと与えられた室での祝宴となってしまう。

椿姫の母、夕木の方は原木卿の第三子、一の姫の出であるため、実家も高位の貴族で自身も奥殿での身分も高い。そのため、大広間での祝宴が予定されている。

「百合様、牡丹様、失礼いたします」

声と共に、沢谷が入ってくる。

「沢谷。水波からの書状、預かってきてはるやろ？　今、帝が姫様の処へお越しですよ」

「あれ、帝が……。なんと良いところに。」

奥殿への立ち入り、椿姫様の祝宴……。蓮姫様と御一緒の時の方が帝の御機嫌もよろしいですし、一度に済ませることができまな

水波から預かってきている書状の内容を考えれば、帝の機嫌が悪くなるのは明らかで。

今、蓮姫の処に帝が居るのなら、ちょうど良いと三人は蓮姫の室に向かった。

拾 彩ふ恋

拾 彩ふ恋

奥殿 大広間

今上帝二の姫、椿姫の祝宴。

盛大な宴のなか、今日の主役である椿姫が母夕木の方に抱かれ、帝に目通りしていた。

「大きくなったな、椿・・・一年、病もなく健やかに過ごしたな。芙蓉より、祝いの品預かってきておる。夕木、椿にこれを」

帝が出したのは、桃色の化粧箱に収められた櫛と簪。両方とも、椿の飾りの付いた見事な品である。

「芙蓉の方様が、椿にと？」

「左様。邪気を祓うという柊から削りだした櫛だそうだ。椿の健やかなる成長を願っている、と」

美しい光沢の黒に、鮮やかな寒椿が描かれた櫛は、それだけで髪を美しく飾ることができるだろう。

「この簪は、予から椿に。椿の髪を飾るのに相応しい簪であろう？」
「ありがとうございます。お心尽くしのお品、椿はなんと幸せな

ことでしよう。

帝、くれぐれも、芙蓉の方様に御礼申し上げてくださりませ。私からもお礼状をだしますが・・・」

女の和子の祝いには、髪飾りを贈るのが慣例である。

その祝いの品を、帝妃から贈られるなど通常では考えられない。

普通、側室の子に帝妃は祝いの品など贈らない。

「芙蓉のお方様に櫛を賜るなど、何と光栄な・・・

椿誕生の折にも祝書を賜るなど、芙蓉のお方様にこれほどのお氣遣いをいただき、椿は何と幸せなことでしょう」

祝書に続き祝いの品まで賜るなど、孫は帝妃に気に入られている、と原木卿も驚喜している。

第一側室の二条の方は、帝妃芙蓉の方に目通りしていない。

二条の方付きの女官の非礼を詫びる書状を送っただけで、夕木の方のように直接会話を交わしたことはない。

今年二歳になる菊姫も目通りなく、祝宴の折にも祝いの品を贈られることはなかった。

紅の間を出され、正室としてのプライドの高かった二条の方は、帝よりも身分の高い、自身が懂れてやまない正帝妃の位を降嫁だという芙蓉の方に直接会うなど、自尊心が許さなかったのだ。

父である西条卿は、再三目通りを娘に促したが、ついにそれは叶わなかった。

芙蓉の方を寵愛する帝はそのような二条の方を許すはずもなく、二条の方の室に通うどころか、菊姫の祝宴にすら自身は出席せず、品だけを贈らせた。

このようなことがあったので、原木卿は帝の出席は勿論、帝妃からの祝品にも驚喜したのである。

「今日の宴に出席できなんだこと、芙蓉がえらく残念がっておった。椿の顔が見たいゆうてな」

夕木に方から正式に招待を受けたが、臨月が近いということで帝から外室禁止を言い渡された芙蓉の方。

臨月にもかかわらず、自分に目通りに来た夕木に方に対する礼儀だと出席したがったが、ついに帝の許可はおりなかった。ならば、と祝品だけ帝自ら持ってきたのだ。

「芙蓉の方様が落ち着かれましたら、私たちのほうからお伺いいたします、とお伝えくださりませ。御出産前の大切なときなれば、今は自粛いたしますれば、落ち着かれましたら是非にと」

愛妃への目通りを強く望む側室に、帝は笑う。

「わかった、そのように伝えよう」

愛妃も、この側室の目通りを望んでいるのだから。

奥殿 紅の間

大広間で椿姫の祝宴が行われているちょうどその時。

正室、二条の方の室に一人の来客があった。

「葵・・・二の姫、椿姫の祝宴に、帝が御自ら祝品を持って御出席されたそうだ・・・」

「帝が、椿姫の祝宴に・・・」

「左様。その上、正帝妃芙蓉のお方様よりのお品も持参され、祝言も賜ったそうだ。」

我が孫姫、菊姫の時は帝の御臨席さえいただけなんだに、この違い……

それもこれも、そなたが帝妃様に拝謁せなんだゆえだとわかつておろうな」

「父上、それはっ」

「苦勞してそなたを正室として入内させたは、このような立場に立つたのではないっ

帝のご不興を買い、室に通われぬどころか菊姫まで遠ざけられ、今では第二側室の夕木の方が立場が上ではないかっ このままでは、我西条の行く末、無いも同じ……」

「父上……」

「太子様御誕生の折には、何があつてもそなたが一番に祝書を届けねばならぬ。」

これ以上、夕木の方に、原木に遅れを取ることは許さぬ。よいな、葵。しかと申し付けたぞ」

足早に室を出て行く父、西条卿を見送り二条の方はポツリとつぶやく。

「芙蓉の方さえおらねば…… 鬼頭の姫さえ来なければ……

全てはあの蓮姫のせいじゃ。

あの鬼姫が悪いのじゃ……」

どこからとも無く、黒い羽が一枚舞い落ちた。

「そうじゃ…… 鬼姫は、退治せねばならぬのじゃ……」

東殿 白雪の間

「奥居・・・それも、紅の間から邪気が？」

「はい、姫様、どないされます？ 今騒がれては、少々・・・」

奥居の大広間で椿姫の祝宴が行われているちょうどその時。

奥居から最も離れた東殿で、百合が蓮姫の元に報告に来ていた。たった今、紅の間から蓮姫に向けて邪気が発せられた、と。

「二条の方か・・・元々そないな気など持ってなかったはずなのに・・・」

だれぞ、手えでも貸してはるんやろか・・・」

ほんの数ヶ月前までは邪気など纏ってなかった二条の方。

それが、急に邪気など飛ばせるようになるなど有得る事ではない。

「どちらにせよ、奥殿内から二条の方が出ぬ限り大した被害は出はしませんやろう。」

どないな手てくるのか、楽しみですなあ」

ころころと笑う蓮姫は、少しも心配していない。

蓮姫の住む東殿には地気結界が張られ邪気が進入する心配は無く、奥殿にも守護結界が張られていて、たとえ内部で邪気が発生しても外に漏れる心配は無い。

宗家当代が自ら張った結界は、何人にも打破できない。

「夕木の方も、椿姫があゝの櫛を側に置いてある限り安心ですし、他の方々は知ったことではありませんし」

「ちょうど帝も奥居不通いですし、西条卿共々、夕木の方には失脚していただきましょう」

楽しそうな牡丹に続き、沢谷までもが言う。

主家の姫が西条の人間に無礼を働かれたと聞いた瞬間から、西条家は排除すべき存在になっていた。

「しかし、二条の方に助力など一体だれが・・・」

奥殿に立ち入れる人間など限られている。

そのうちの誰かなのであろうが、宗家の結界内で感知されずに助力するなど、並大抵のことではない。

嫌な予感がすると、百合は東殿を眺めていた。

拾壺 嘯吹く

拾壺 嘯吹く

奥殿 紅の間

二条の方の室に漂う禍々しい邪気。

日に日に強くなっていく邪気に、女官たちも次々体調不良を訴え倒れていく。

次第に奥居中にまで邪気が侵出し、奥居の大事となっていた。

「葵！ 葵！！ そなたは我家を潰すつもりか？！ 今ならまだ大事ないっ 早くやめるのだっっ」

自室に籠り呪術を行う娘に、西条卿は声を荒げる。

幸いにも帝不通のため、表殿にまで騒ぎは広がっていない。
一しかし、それも今の状況から考えれば時間の問題だろう。

室の中から絶え間なく聞こえる呪文。

それは、二条に方の声に間違えは無く。

呪術の知識など無かったはずの娘の凶行に、西条卿は戸惑いを隠せない。

「ええいつ いつからじゃ？！ いつから葵はこのようなことを始めた？！ そのほうら、まったくきづかなんだのか？！」

何の反応もない二条の方にじれ、側仕えの女官に詰め寄る。

「申し訳ございませぬ。椿姫様祝宴の頃より菊姫様を遠ざけられるようになり、気づいたときには既に・・・」

菊姫様も御気分が優れぬと伏せられ、お方様は室に籠られ・・・」

叩頭したまま告げられた事実には、西条卿は慌てた。

「我家と皇家を繋ぐ大切な菊姫に大事あったら何とするかっすぐに禍祓いをする　早く僧を呼べ！！」

「その必要は無い」

背後からかかった聞き覚えのありすぎる声に女官たちは尚一層叩頭し、西条卿は顔色を変えた。

「帝・・・！！」

不通が続いていた帝がこのタイミングで奥居へ、それも二条の方の室へ姿を現すなど誰が想像できようか。

帝がこの場に現れた理由が判らぬほど、西条卿も愚かではなかった。

「なるほど・・・　鬼慧殿がご案じなさるはずや・・・」

「御当代様が、何か・・・」

ポツリと呟かれた帝の言葉に、西条卿は不審げに問う。

まさか、宗家当代の名が出てくるとは思わなかったのだろう。

「奥殿より邪気があり、と書状と共に遣わして下さった」

帝の言葉で、初めて帝の左後ろにいる者に気づく。

黒の直衣を纏った、年若い風貌の男。

「こちらは・・・？」

帝自らが連れてきたその男に、嫌な予感が走る。
邪気のために、当代が遣わした、となれば・・・

「鬼頭第三分家、金鬼家当主金伯。宗家御当代様より禍祓いの命賜り参ったしだいにて」

静かに告げられた言葉に、西条卿は声も無く叩頭した。

「奥殿全て御当代様の結界内にて、このまま禍祓いを行います。奥殿封鎖と、外室禁止の布令、あと、広間をお借りしたい」

帝相手に淡々と進めていく金伯に、西条卿はもはや言葉も無い。

「この室ごと封印しますゆえ、西条卿も外室を」

「帝はいかがされますか」

まさか、帝までも禍祓いに出るわけではないだろうと声をかければ、

「予も金伯殿と広間へ参る」

と、意外な返答が返ってきた。

「では、私も御一緒させていただきたい」

帝が受けるのに自分が受けないわけにはいかない、と禍祓いへの同席を希望する西条卿に、金伯は冷ややかな視線を送った。

東殿 白雪の間

「あれ、金伯の禍祓いが始まったようですね」

開け放たれた窓から奥殿の方を見ていた牡丹が蓮姫に声をかける。守護結界内に満ちていた邪気が、急速に四散していく。

「式だけでも十分や思いますのに、わざわざ金伯殿がお越しになったとか。」

これで西条家も終いですなあ」
ころころと楽しそうに笑う牡丹に、百合も返す。

「帝に対する礼やなくて、姫さまに対する礼ですやろ。
御当代様の結界内に、よもや直径筋以外の者を入れるわけにはいきませんやろうし」

鬼頭宗家に出入りできるのは、分家の中でも直径筋のみ。
当代に拝謁でき、直接言葉を交わせるのは、当主のみである。

今回、金鬼家当主である金伯が出向いたのは、降嫁したとはいえ当代実姉の蓮姫に礼を尽くしてのことだろう。

「この騒動、鬼彗は何と？」

今まで黙って外を見ていた蓮姫が問う。

牡丹が言ったように、本来ならば式神だけでも十分払える類の禍であるにもかかわらず、わざわざ金鬼家当主が出向き『禍祓い』を行っている。

これには、何か理由があるのだろう。

「御当代様は、何も……。ただ、姫さまは何も心配なさらぬように、と」

「そうか……。禍祓いが済めば、鬼彗から何ぞありましょう。そろそろ終盤……」

ここからの見物も悪くは無い」

邪気の無くなった奥殿を見つめ、蓮姫は青玉へと手を伸ばす。

「姉上・・・」

見計らったかのようなタイミングに、蓮姫はゆっくりと窓を閉めた。

表殿 朝見の間

昨日行われた奥殿での禍祓いは、既に殿上人の知るところとなっていた。

「西条様もお終いだらう？」

「正室様が帝妃様を呪うだなんて・・・」

「それも、今回は相手が悪すぎだろう」

そこかしこで聞こえる噂話。

正貴族西条卿の娘であり、正室二条の方の呼称を頂く葵姫は、帝妃を呪った。

それも、帝妃の位に就くのは鬼頭宗家の一の姫で、帝が寵愛する唯一の姫。

帝をも凌ぐその身分から、西条卿が秘密裏に処理をすることは不可能だった。

「宗家の御当代様が、芙蓉の方様をご案じになって金鬼家当主殿を遣わされたそうじゃないか。

鬼頭宗家の直径の姫君を呪うなんて、正気の沙汰じゃない」

この場に本人が居ないこともあり、噂話は止まらない。

「今、西条様は佐官監視の下で監禁らしい。紅の間に居た女官や側仕え、菊姫様までも・・・」

「じゃあ、やっぱり・・・？」

「ああ、降格は確定だろうよ」

ざわざわと煩い空間に、朝見開始を告げる鐘が鳴り響き、帝が入室する。

上座に腰を下ろす帝の後ろに、黒の直衣姿の年若い男が一人。殿上人が座る下座ではなく、帝のすぐ下に腰を下ろした。

公卿よりも帝に近い位置に座り、帝もそれを認めていることから、その男の身分が知れた。

「本日は、金鬼家当主、金伯殿に御臨席賜った。昨日の禍祓いでは、皆に心配かけた」

「昨日の邪気発生源は、奥殿紅の間。正室二条の方、唱呪法にて邪気を発生。既に正気ではなく、禍に飲まれていたため室全体の封印による禍祓いを実行。」

奥殿全てが御当代様の結界で覆われていたため他所への影響は皆無。奥殿も清昇済みである」

淡々とされる報告に、誰も口を挟む者は無く。

「邪気に当てられた方々も回復に向かわれ、後遺症の心配も無く、奥殿への参内も何ら問題は無い」

奥殿への立ち入りも許可が下り、安堵したのは身内を入内させている者達だった。

「して、二条の方は？」

「二条の方の身、我が金鬼にてお預かり致しております」

「鬼彗殿の進めもあり、金鬼家にて清浄していただく。

清浄済み次第西条一門は北の地へ流刑。二条の方並びに菊姫は皇籍より除籍とし、その生涯において北の地より出ることは許さぬ。

これより日は夕木の方を正室とし、椿姫を予の一の姫とする」

前代未聞の禍騒動に下された処分は、流刑追放による没落と、こちら前代未聞の結末を迎えた。

表殿 政務の間

「鬼彗殿には、お礼と共に大変ご心配をおかけいたしましたと、お伝えくだされ」

朝見終了後、金伯と共に場所を政務の間に移し、帝が頭を下げていた。

「御当代様の御親言、お聞き入れくださり、こちらこそ御礼申し上げます。

御当代様は姉君、蓮姫様をいたくご心配されておいででしたので、これで御安堵召されたことでしょう」

たった一人の姉姫のことを、当代はこの上なく大切にしていた、と帝も思い出したのだろう。その顔に微笑が浮かぶ。

「芙蓉の方に、挨拶でも？」

「いえ、大切な御身、余計な心配はおかけしたくございません。御当代様より報告がいつているでしょうし、今回はこれで」

本家一の姫への礼儀より、その身を気遣い目通りを遠慮するとう金伯に、帝もそれ以上のことは言わず。

「臨月も近く、安定しているゆえ大事無い、とお伝えくだされ」
「しかと。和子様ご誕生の折には改めてお伺いいたします、と蓮姫様にお伝えください」

そう言って、金伯は帝の御前を辞していった。

東殿 白雪の間

「姫様、夕木の方より書状がきております」

「あれ、何でっしょろ」

牡丹が持ってきた書状を受け取り、読み進める。

「祝品で贈った櫛のおかげで、椿姫が禍の影響を受けることなく過ごせたことの礼や・・・」

夕木の方はもちろん、室内全員何事もなかったとのこと・・・」

「木鬼家が姫様の御依頼で特別に誂えた櫛ですからなあ。わざわざ柎を削りださせましたし」

百合の言うとおり、椿姫の祝品で贈った櫛は、特別神気の強い柎を木鬼家によって加工させたものであり、多少の邪気ならば寄せ付けることもない。

「二条の方、皇統から除籍だそうです。」

菊姫を含め、西条の血族は残らず北の地へ流刑……。これより後、夕木の方様を正室とし、椿姫様を一の姫様に据えられると先程勅令が」

沢谷の局が言えば、百合も牡丹も笑みを深くした。

「奥殿中に広まっていた噂、あれも元は二条の方付きの女官だった言いますし、これで少しは静かになりますなあ」

「ほんに・・・ 正室夕木の方様は姫様の覚えもめでたく、一の姫椿様は姫様のお気に入り・・・」

実家の原木卿もいたくお喜びとか。

よもや、帝妃・正室の両方を敵に回す馬鹿はいませんかでしょう」

西条卿が失脚し、臣の最高権力は正貴族原木卿に移った。

正室の父として、また一の姫の祖父として宮中での地位も確立され、表舞台に出ることの無い鬼頭宗家と皇統貴族を除けば対抗勢力は皆無である。

その卿が礼を尽くせば、帝妃を脅かす存在や陰口は無くなる。誰も、進んで自身を破滅させたいとは思わないだろう。

「あれ、帝がお越しです。では姫様、これで・・・」

結界の反応で帝の来訪を感知した三人が蓮姫を残して移動すれば、すぐに帝が入ってくる。

「芙蓉、心配をかけた。無事収まったゆえ、安心せい」

座る蓮姫を抱きとめ、帝が言う。

「奥殿、何事もなく？」

「左様。金伯殿のお力にて、何事も無く終わった。邪気に当てられた者も次第に回復に向かっておる。

元凶の二条も西条一族全て流刑にしたゆえ、何も心配いらぬ」

「菊姫様ともども、皇統より除籍されたとか・・・」

何の罪も無い菊姫様がお可哀想で・・・ 白陽様のお血筋であられますのに・・・」

後ろから抱く帝に、菊姫だけでも手元に残せば良かったのと言え

「そなたを呪った女の子供など、災いなだけぞ。姫が欲しくば、椿がおる。」

いや、そなたが姫を産めばよい。そなたに似た、美しい姫を・・・

「

もはや、蓮姫以外に産ませるつもりは無いと当然のように言う帝に、蓮姫は苦笑し身を寄せるしかなかった。

拾貳 秋に浮雲

拾貳 秋に浮雲

奥殿

邪氣に当てられた者達も回復し、平常が戻ってきた。
相変わらず帝不通の日々が続いていたが、今日ばかりは違っていた。

朝見終了より半時ほどで、やっと平常を取り戻した奥殿にその知らせは舞い込んできた。

「まことか?! まこと、帝は!!」

中庭に程近い水波の室から、歓喜とも驚愕とも取れる声が響いた。
「はい、只今、そのように布令が!!」

興奮した女官の声に、水波の声も高くなる。

「本日、奥泊まり、と!!」

歓喜に満ちた水波の声に、女官達も喜び合う。

「こうしてはおれぬっ 奥泊まりとあれば、お迎えする用意を。帝は、どの室にお泊りか?」

「御正室、夕木の方様の室にお泊りと・・・」

布令を知らせにきた女官の声が困惑気味に下げられた。

「御正室様の・・・?」

普通であれば、いくら正室であっても出産して1年ほどで帝が泊まるなど考えられないことである。

奥殿内の権力が偏るのを防ぐためでもあるし、奥殿には数多くの女達が控えている。

今上帝にも、名ばかりの側室達をはじめ数十人の女達が控えている。

「間違えないのか？ 他の方の室ではなく、正室様の？」

まさか、夕木の方の室だったとは思わなかった水波も当惑する。

「はい。本日、御正室夕木の方様の室泊まり、と」

間違いない、という女官に水波もそれ以上はいえず。

「お泊りくださるだけで良い。他の側室様たちにもお知らせせよ。お渡り時にお見初め頂ければ上乘」

不通の日々を思えば、可能性が出てきただけ良い、と言う水波に、女官達は布令を伝えるために奥殿中を駆け回る。

“ 帝奥泊まり ” の布令は、瞬く間に広がった。

東殿 白雪の間

「本日、帝奥泊まりの布令が今・・・」

「あれ、珍しい。帝は、今宵お越しにはなりませんの」

布令を持ってきた沢谷に、牡丹が面白そうに返す。

帝が蓮姫の元に来ないというのに、その顔に憂いは無かった。

「百合様、よろしいのですか？ 奥泊まりなど・・・ 側室に和子などできては・・・」

「ああ。今日、帝がお泊まりなのは夕木に方の室や。姫様が夕木の方に礼状の返事がかかはってなあ。帝は、それを届けにいきますのや」

ころころと笑う百合に、沢谷の顔もはれる。

「そうでしたか……。しかし、わざわざお泊りにならずともお渡りになれるだけで十分ですのに」

それでもやはり面白くないと沢谷が言えば、

「椿姫の様子も見てきて欲しい、と姫様が頼みましたのや。先の騒動ではえらい不安でしたでしょうから、一緒に居てあげて欲しい言うて帝にお願いしてはりました。」

姫様、椿姫をえろう可愛がってらっしゃいますし、帝も断りきれなんだようすなあ」

正室を、女を抱きに泊まるのではなく、一の姫の子守に行くのだと可笑しそうに言う百合に、沢谷も納得する。

「帝唯一の姫様ですし。この後、蓮姫様が姫様を御産みになっても一の姫さまは椿姫……。帝もお断りできなくて当然ですわね」

一の姫であった菊姫が除籍になり、椿姫が名実共に一の姫になった。

菊姫と違い、帝も帝妃も椿姫を可愛がっているのは周知のために、今回の奥泊まりの目的が椿姫であっても、誰も文句は言えない。

「姫様にお知らせしてまいります」

牡丹が部屋を後にすれば、慌しい奥殿とは対照的に静かに時は過ぎていった。

表殿 政務の間

帝の奥泊まりの布令から、表殿は静寂とは無縁の空気に包まれていた。

血族が入内している者は、何とか今回のお渡りで見初めてもらおうと躍起になり、新しい衣装や装飾品の手配に余念が無い。

女官達は久し振りの奥泊りの準備に慌しく動いている。

「皆、忙しないことや。奥泊まりといっても、椿の処に行くだけのこと。間違っても女を抱くわけではない。」

なあ、そうは思わぬか、糸桐」

「皆様、帝にお見初め頂こうと必死なのですよ。御懷妊はおろか、お手さえ付いておられない御側室様方が多数控えておられますから自分の執務室で慌しい表殿を見ながら帝が言えば、糸桐と呼ばれた年若い青年は苦笑でもって答えた。

「予が望んだ側室など一人もおらぬ事、そなたも知っておろう。唯一人と望んだ愛姫がこの手に居るのに、どうして他の女が要るのか」「その帝妃様がご懷妊中であられるからこそ、皆が躍起となりましよう。」

帝の慰みでもお情けが頂ければ実にめでたい。名ばかりの側室では意味がありませんから」

忌々しい、と帝が顔を顰めるのに、糸桐は楽しそうに言う。

家臣と言うより、友に近いそれである。

「芙蓉と比べるのもおこがましい、慰みにすらならん者たちばかりや。見初めるはずが無い。」

糸桐も九鬼の出だったな。芙蓉と会ったことはないのか？」

「九鬼の名を頂いてはおりますが、沢谷様のように直系ではございませんので直接お会いしたことはないのです。宗家に出入りできますのは、分家の直系のみ。御当代様や姉姫様に御目通りできますのは、分家当主のみでございますので」

直系の分家ですらない自分は、宗家にすら入ったことが無いとわらう。

九鬼糸桐。沢谷の局の従兄弟にあたるこの男は、今上帝の右腕と呼ばれる友である。

「帝妃様として上がった折、初めて拝顔いたしました。九景様より、大層お美しい方だと伺っていましたが、まさに傾国の美姫と

謳うに相応しい方。帝が是非にと望まれたお気持ちも納得いたしました」

あんなに美しい方が側にいるのなら、他の女など要らないのも道理、と笑えば帝も否定せず笑う。

「傾国の美姫とは、よく言ったものだ。しかし、芙蓉の為ならばこの位も、国も、予の命すら捨てても惜しくは無い」

高らかに笑う帝の声が、執務室に響く。

「本当に、何を捨てても手に入れたくなる・・・」

静かに発せられた糸桐の声は、帝の声に消された。

奥殿 紅の間

「芙蓉がえらい心配しておった。夕木よりの書状で、椿も大事無いと知り、心は落ち着いたがどうしても直接会いたいというてな・・・何とか宥めて予が来た」

そう言って芙蓉の方から預かってきた書状を夕木の方に渡す。

夕食前の時間。

奥泊まりにしては早い時間に渡ってきた帝は、出迎えた他の側室達には目もくれず夕木の方の室に入った。

何とか目に留まろうと必死だった側室達は、新調した衣を身に纏い、数々の装飾品で飾り立て帝を出迎えた。

しかしながら、煌びやかなその装いの側室たちの誰一人として帝にお声がけの叶う者はいなかった。

それでも、帝のお通いの可能性が無くなるまで一帝が奥殿から出るまで一は、自分の室に籠ってお通いを待っていることだろう。

稀にはあるが、一度のお渡りで数人の室に御通いになられるこ

とがあるのだ。

「まあ、芙蓉の方様がそれほどに御氣に掛け下さるとは・・・帝、やはり椿と共に直接御目通り致したく存じますれば、芙蓉の方様が落ち着かれましたら必ずお教えくださりませ」

自身が直接帝の寵愛を得られないのであれば、一の姫の生母としての立場を奥殿で確固たるものとしたい夕木の方は、唯一の愛姫である芙蓉の方との仲を円満にと考えている。

幸運なことに、自身の娘である椿姫は帝にも帝妃にも大層可愛がられており、こうして帝もわざわざ通ってきてくれる。

「芙蓉もそう申しておった。無事太子を出産せし折には、そなたらに会いたい、と」

おとなしく隣で眠る椿姫の頭をなでながら帝は言う。

「椿の無事な様子も見だし、夕木に書状も渡した。奥泊まりの布令出させたが、他の女の氣配が邪魔やな・・・」

紅の間に移ってから、不自由ないか？」

室に入ってから消えることの無い、伺うような氣配に顔を顰めて低が言え、

「この氣配は、他の側室様方の使い女官のものでございましょう。」

帝がこの室より出られれば、主の室に通っていたかどうか、こちらを伺ってますのでしょうか」

皆様、必死の御様子でしたから、と夕木の方は笑った。

普段はこんなことはない、と言え、帝はいくらか安心した様子をみせた。

「そなたは氣にならぬのか？」

「私には、ここまで御氣に掛けてくださる椿がおりますれば、これぐらいのことは仕方がないと思っております。」

帝妃様から祝品を賜ったのは椿だけでございますれば、皆様の嫉

妬をかってしまうのは道理で・・・」

ころころと笑う夕木の方に、帝も笑う。

唯一、帝の姫を産んだ夕木の方。

奥殿最高位の帝妃芙蓉の方が東殿に居を移した今、その地位に立っているのは夕木の方である。

「芙蓉が気に掛けておるおなたらに何事かあれば、芙蓉が悲しむ・

・
奥殿でお方様と呼ばれるのは夕木だけや。これから後も、それは変わらん・・・」

そう言っ出て出された、一枚の札。

「帝、これは？」

「先の禍払いで金伯殿に作ってもらった。鬼門に貼っておけば、邪気を寄せ付けぬという。芙蓉が贈った櫛と共に、そなたらを守る物となるう」

全ては芙蓉の方が悲しみのを防ぐため、とはいえ帝がここまで氣遣うのもまた事実。

他の側室たちから見れば、夕木の方は十分に寵愛を受けているように見える。

実際には寵を頂いていなくとも、そう見えることが奥殿では何よりも大切なものである。

それを正しく理解している夕木の方は、強かにお方様の地位に立ち続ける。

「ありがとうございます」

にこりと笑う夕木の方に、帝は満足そうに頷いた。

拾貳 秋に浮雲（後書き）

ここで一段落・・・

やっと糸桐登場。

拾参 片割れ月のよう

拾参 片割れ月のよう

東殿 白雪の間

「幼名、でございますか・・・？」

どこか困惑気味の蓮姫の声に、帝の優しげな声が重なった。

「左様。幼名というても、帝位を継ぐまではその名で呼ばれることとなる。もつとも、呼ぶのは両親である芙蓉と予だけであるが」

皇家太子は、通常『宮様』と呼ばれる。

御名を呼ぶことが無礼とされるためであるが、名には力があり、呼ぶことによって縛られる可能性を無くすためであることは自身が理を知る蓮姫には容易に知れた。

「白陽様は、幼名は何と？」

「利羽、と言う。母上が阿利の方とゆうてな。その一字を頂、そう名付けられた」

先帝妃であった阿利の方は、先帝の寵愛を受け、今上帝と三人の姫をもうけた四児の母であった。

先帝には、帝妃阿利の方の他に五人のお方様があり、そのうちの二人が太子を産んでいた。

阿利の方は先々帝の姉姫の子で、皇族貴族出身だったため奥殿中のどの側室よりも身分が高かった。

今上帝の二年先に太子がいたが、生母の身分が低かったために今上帝誕生と同時に先帝によって帝位継承を外されている。もう一人太子がいたが、生まれつき体が弱く三歳になる前に仏門に入っている。

他の子供は皆姫ばかりだったので、帝位継承問題も無かったという。

「太子の名に、鬼彗殿の一字を頂いても良いだろうか？」

帝の言葉に、蓮姫は軽く目を見張る。

「鬼彗の字、でございますか？」

名に“鬼”に一字を使うのは、宗家当代になる者にしか許されない。

そのため、使うならば“彗”の字になるが……。

「太子には、尊き宗家の血が流れておる。それを大切にしたい。

御当代が、鬼彗殿が許してくださるなら、彗羽、と」

宗家当代と、今上帝から一字づつとり、生まれてくる太子の名にするという。

理を知る宗家が、その体現者である帝家に入り込む。

「彗羽……なんと良き名でございます。はよう呼んでやりとうございます」

愛しげに名を呼び腹をさする蓮姫に、帝も満足気に微笑んだ。

「彗羽の宮様でございますか……」

「何と、帝自ら“彗羽”と」

「「よろしゅうございましたなあ」」

帝が表殿へと出た後の白雪の間。

先程のやり取りを聞いた百合と牡丹が声を揃えて言う。

「ほんによかった……。名は鎖となり、言葉には力が宿る。わたくしが呼ぶたびにこの子は鬼頭の力を得、帝が呼ぶたびに“帝”へと becoming ゆく……。名前でもって帝位を縛り、名前でもって力を得る」

ころろと楽しそうに笑う蓮姫に、百合も牡丹も笑みを濃くする。理で定められているとはいっても、それは結果だけにすぎない。理を知る宗家といえど、細々とした家過程を知ることとはできないのだ。

蓮姫が生まれたときから、帝に求愛され帝妃となることは理の結果として定められていたが、何代目の帝に求愛され、何代目の帝妃につくかは知ることが出来なかったし、鬼彗と蓮姫の子が帝の子として帝位につくことは定められているが、それが何番目の子供で、何代目の帝位につくかは知ることが出来ないのだ。

もしかしたら、彗羽の宮ではないのかもしれない。

—この後、蓮姫が鬼彗の子供以外を身籠ることが無いのは定められている—

「御当代様の先見では、九日後が予定日とのこと。不穏なる気もあるとの予見ですゆえ、くれぐれもお気をつけくださいませ」

鬼彗の結界内であるとはいえ、万全ではないという。

先日の二条の方のように、内側から侵食されれば無害ではない。「帝と沢谷、百合と牡丹。わたくしが許可した者しかこのこの殿には一歩たりとも入ることはできません。無用な心配や思いますけど、せっかくの鬼彗の心遣いありがたく受けましょう」

「あれ、沢谷がきましたなあ。早い時間に珍しい」

来訪を知らせる鈴の音に意識を向ければ、沢谷がこちらに向かっていた。

時間を確認すれば、まだ表殿では朝見の刻限。

「何ぞあったのかも知れませんか。牡丹、迎えてやりなさい」

蓮姫の声に牡丹が立てば、襖は音も無く開く。

「何ぞ、嫌な予感がしますなあ・・・」

ぼそりと呟かれた百合の言葉に、蓮姫も苦笑した。

「姫様、本日分の書状でございます」

音も無く開いた襖から中に入れば、予見していたであろう蓮姫と百合を迎えられた。

「夕木の方と水波、後は誰からや？」

夕木の方とは毎日書状のやり取りをし、水波からは隔日で書状が届く。

「姉一の君、妹五の君、妹七の君です。後は今浄香中ですので、また後からお持ちします」

文箱を渡して退室しようとするれば、百合に止められた。

「私が見に行くよって、牡丹は姫様のお側に」

牡丹の了承と共に出て行く百合を見送って、蓮姫の側に腰を下ろす。

「しかし、日に日に増えますなあ」

「仕方の無いことですえ？　今より生まれてからのほうが色々増えますやろ。皆が祝福してくれるのは嬉しいし、ありがたいおもわなありませんなあ」

ころころと機嫌よく笑う蓮姫に、牡丹は安堵する。

出産を控えた蓮姫に、ストレスを与えてはいけない。

「帝にお願いでして、もう少し規制を厳しくしていただいてはいかがですか？」

芙蓉の方への書状は、帝が規制をかけ、水波が選出しているためだいぶ少なくなっている。

それでも多い書状に、蓮姫は必ず返事をかく。

「有り余る時間の消費にはちょうど良い。浄香も終わった様子。牡丹、これを沢谷にわたし、残りの書状もここへ」

蓮姫の望みを叶えるため、牡丹は部屋を後にした。

奥殿 紅の間

「夕木の方様、水波でございます」

書状を東殿へと届けた奥居頭が、正室夕木の方の室に顔を出す。

「水波、ご苦労でした。」

沢谷の局様は、芙蓉の方様の御様子、何と仰せでしたか？」

いくら仲が良くても、東殿から出られない蓮姫の様子を、奥殿に住む夕木の方が直接知ることとはできない。毎日の書状のやり取りだけでは、どうしてもズレが生じる。

「はい。もう産み月を迎えられ、あと数日で御出産との事。産気づかれた折には、すぐにお知らせ下さると」

「そうか……。何事も無く御出産あそばせば良いが……。」

芙蓉の方様は、ただの側室に過ぎない頃より、私や椿に大変良くしてくださった。今でも、御自身が産み月を迎え大変であられるのに椿の事を気に掛けてくださる……

御出産の御無事のため、参願に参りたいがどうかであろうか……。帝妃出産には、和子と妃の無事を祈り参願や祈祷が行われるのが常である。

夕木の方出産の折も、除籍された二条の方出産の折もそうであった。

しかし、正帝妃である芙蓉の方に対しては、そのどちらも行われていない。

「夕木に方様、しかし、帝は全ての行為を禁じておられます」

水波の言うとおりに、帝は芙蓉の方に対する祈祷、参願などの行為を他者が行うのを禁止していた。

「ええ。何でも、宗家の御当代であられる弟君が芙蓉の方様のために御自ら御祈祷されておいでとか。総ての術の頂点に立たれる御当代様が行われているため、他は必要ないと」

「では、いくら夕木の方様といえ、その禁を破られては・・・。

参願などなさらなくとも、心よりお祈り申し上げれば、お方様のお心、必ずや和子様や帝妃様に届きましよう」

表殿 政務の間

「御当代様が御自ら？」

「左様。帝妃出産の折の参願祈祷を初めとする呪術的行為の禁止を願われた。外からの呪術は鬼慧殿の結界に弾かれてしまうゆえ、意味がないと」

朝見が終わり政務の間に入った帝と糸桐は、決済書類を片手に取り留めの無い会話をするのが常である。

今日は、出産を間近に控えた帝妃が話題の中心だった。

「御当代様の結界でしたら、そうなりましよう。帝妃様に向かうあらゆる呪術を弾き、あまつ術者に跳ね返してしまいましよう」

笑う糸桐に帝も笑う。

「御当代様の芙蓉への気の使いよう。実の姉弟でなくは恋仲と疑うところ」

思えば、入内を打診していた頃から鬼慧は蓮姫を大切にしていた、と帝は言う。

それは、まさしく寵愛と言えるほどの。

「鬼頭のお血筋は特別ですから。そもそも、御宗家に直筋がお二人

いらっしやることが奇跡」

「ああ・・・鬼彗殿もおっしゃっていたな。本来ならば表に出せぬ大切な姉姫だと。その時は降嫁を断る方便かと思ったが・・・？」
何か他に深い意味があったのかと糸桐に問う。

「私も詳しくは存じませぬが、御宗家の和子様は必ずお一人だそうです。お生まれになりし時よりその身に神力が備わり、その力でもって御当代様になると。ですから、御当代様がその御位に御着きあそばしたとき、姉姫様が傍らにお控えになっていらしたと一族総てが驚愕したと」

その血が特別だからこそその特殊性。

「では、芙蓉も和子は太子しか産めぬのか？」

鬼頭の和子が一人なら、芙蓉にもそれが当てはまるのではないか。宗家の和子が一人なのは、その血を『外』に出さないためだろう。芙蓉に似た美しい姫が欲しかったのに、と言う帝に、

「帝の御子であれば問題はないでしょう」

と、糸桐は呟いた。

拾肆 袖返す夜

東殿 白雪の間

早朝より産気づいた蓮姫をかこみ、百合、牡丹、沢谷が和子出産を手伝っていた。

清浄を保つため帝といえど入殿出来ず、殿全体に鬼彗による結界で外界と遮断されていた。

「姫さま、お息みくださいませ。もう少しでございます」
絶えることなく繰り返される百合の声。

美しい顔に汗をにじませ、出産の痛みに耐える蓮姫。
陣痛は思いの外長く続き、蓮姫の体力を奪っていた。

「百合、水鬼の神水が届きました。早く姫様に」

「さすが鬼頭の純血の和子様・・・ 御当代様の結界だけでは神力が足らぬ・・・」

姫さま、神水でございます。お含みください」

神水を満たした杯を蓮姫の口元へ持つていけば、ゆっくりと口に含み、飲み込む。

体内に神力がもどり、いくぶん和らいだ表情を見せる蓮姫に、百合はもう一度声をかける。

「お息みください」

「百合、木鬼の神木をくべます。沢谷、香炉を」

部屋中に満ちていた神力が蓮姫の呼吸に合わせて薄れていく。

一際強く蓮姫が息んだ瞬間。

「うんぎゃあっ」

大きな産声とともに、一気に神力が放出された。

「おめでとうございます、姫さま」

全身を神力に包み、誕生した和子。

鬼頭宗家純血子の誕生に、世の神々が祝福を贈った。

表殿 政務の間

「和子はまだ生まれぬか?! 芙蓉の容態は?! 沢谷からの知らせはまだか!!」

昨夜から清浄のためと東殿に戻っていない帝は、早朝に陣痛の知らせを受けてから、政務すら手に付かなくなっていた。

もつとも、太子出産の布令があるまで、何人の害室も禁止しているので、それを咎めるのはいないのだが。

「帝、落ち着かれませ。聞けば、御当代御自ら神気を満たすための結界を張り、水鬼家から神水、木鬼家から神木、木鬼家から神札など、万全の構えとの事。ご心配いりますまい」

唯一の例外として、帝の傍らに控える糸桐が帝に声をかける。

「そうはゆうても、糸桐。東殿に入ることすら叶わぬ。和子よりも、芙蓉が心配でならぬ」

自分の正統な世継よりも、ただ一人の愛姫の身が心配だと言う帝に、糸桐は苦笑するしかない。

世の権力者たちは皆、自身の世継を生ませるためだけに何人もの女を囲うと言うのに、この最高権力者は愛姫のほうが大切だという。

「芙蓉のお方様は、神のご加護を受けていらっしゃる身。もう数刻もしないうちに、太子様とご一緒の面会が叶いましょう」

だから、政務を、と続けようとしたとき、控えめな足音とともに待ち望んでいた人物が現れた。

「帝、おめでとうございます。元気な太子様のご誕生でございます」「生まれたか・・・ して、芙蓉の容態は?」

「芙蓉の方様も安定し、帝を御呼びするように、と」
「帝、おめでとうございます。私は失礼しますので、どうぞ・・・」
糸桐の声を背に、沢谷と帝は政務の間を後にした。

「さて、お生まれになったか・・・。濃い神気の気配に、安定せぬ力の波動・・・一体、誰の御子であるのか・・・」
残った糸桐は、東殿の方を見て、言う。

「あの御方の御子にはかわりない、か・・・」
くつくつと、嗤う。

「忌々しいのは、この結果・・・」
遮断された、貴女の気配。

「それでも、感じる・・・」
求めている、それ。

「御子を生んで変わってしまったかと思ったが・・・」
嬉しい、誤算。

「匂い立つようなこの気は変わらないな・・・」
恍惚とした表情で、

「いつかは、我が手に・・・」
うっとり、眩く。

「今しばらくは、喜びの中に・・・」
美しく、気高い貴女のために。

「夢にまで見る、その御姿」
望むのは、

「輝く貴女を、この手で・・・」
汚したい。

拾伍 激つ瀬に流る

奥殿 紅の間

「ようやくと、夕木の方様と椿姫との面会が叶いました。いつも、お心のこもった書状を頂きありがとうございます」

「芙蓉の方様、もったいないお言葉でございます。

私のほうこそ、椿にはこれ以上ないほどのお心づくしを頂、また私にもお心を配っていただき、お礼のしようもございません」

太子、彗羽の宮誕生から十日程たった吉日。

正帝妃芙蓉の方は、正室夕木の方の部屋を訪ねていた。

「宮様も健やかなるご様子。よろしゅうございました。

帝が、あまりお泣きにならない、と心配されておりましたが・・・

」

蓮姫の腕に抱かれる彗羽の宮を見る夕木の方。

目が合えば、宮はきゃっきゃと声を上げて喜ぶ。

「ええ・・・ よう笑うのですが、さほど泣かぬのです。不快なきには泣くのでさほど心配はしておりませんが・・・

帝がいたくご心配下さり、先日などは医師や薬師やと大騒ぎで」
ころころと笑う蓮姫に、夕木の方も笑う。

「椿姫も一人立ちがおできになったとか。お散歩に出られるようになるのも、そろそろでしょう」

夕木の方の隣におとなしく座る椿姫。

自分の名前が呼ばれたため、蓮姫に目を向ける。

「椿姫、姫の弟の宮でございます。どうか、可愛がって下さいませ」
腕の中の宮を椿姫に見せれば、興味深々といった様子で宮に手を伸ばす。

「これ、椿。宮様にご無礼を」

夕木の方が慌てて椿姫の手を掴もうとするが、

「夕木の方様、よろしゅうございます」

宮は椿姫の弟。仲ようしてほしゅうございます」

宮にはたった一人の姉姫なのだから、と蓮姫に言われ、夕木の方はいたく喜んだ。

正室の生んだ姫と、正帝妃の生んだ太子。

生まれたときからその立場ははっきりと上下関係が決まっている。そもそも、正妃が、いくら正室とはいえ側室の産んだ子供に自身の生んだ子供を合わせるなどない。

それが、蓮姫は椿姫を太子の姉姫だと確かな立場を認め、目通りまでさせたのである。

「もったいなきお言葉・・・」

夕木の方が喜ぶのは当然であった。

「そろそろ、この奥殿の中庭も花木が美しくなってきましたなあ。

満華の頃には、またこうしてお会いしようございます」

花木を愛でながらの茶事にご招待しても？」

部屋から見える庭に目をやれば、色づき始めた草木の美しい季節。「勿論でございます。お呼びくだされば光栄にございます」

中庭の池のほとりなどが良い、という蓮姫に、夕木の方も同意する。

「芙蓉の方様、夕木の方様、そろそろ刻限でございます。お出まし下さい」

紅の間の外から、奥居頭水波の声。

「あれ、もうそんな時間か・・・芙蓉の方様、表殿での祝儀より先に宮様と御目通りさせていただき、誠にありがとうございます」
「いいえ。本当なら、もっとはようにお会いしとうございましたに、おそうなつてしまい、申し訳ないことをしました。

これより後は、もっとお会いする時間もできましように。また、お付き合いくださりませ」

深々と礼を取る夕木の方に笑いかけ、表殿で行われる祝儀に出席するため、連れ立って紅の間を後にした。

東殿 白雪の間

彗羽の宮誕生の祝儀が行われているちょうどその刻限。

留守役の沢谷の局と牡丹は、蓮姫には内密の仕事があった。

「では牡丹。外結界に歪みがある、と？」

青玉から流れる声は、鬼彗の声。

「はい・・・御当代様の外結界、地気結界に、ほんの少しではございますが歪みがあります。

昨夜まではございませんでしたので、今朝か、昨夜帝が戻られてからできたものと」

伏して答える牡丹も、戸惑いが隠せない。

鬼頭当代の結界に歪みをもたらせるなど、只人にできることではない。

「姉上は、お気づきか？」

「いいえ。蓮姫様はお気づきではございません。

宮様ご出産の折より、神力による守護結界が宮様と蓮姫様を包んでおりますので、地気までは感知されていないご様子」

強力な守護結界のおかげで、髪の毛一筋ほどの傷も付かない。

「今一度、帝殿全体に結界を張りなおそう。各家当主とともに御目通り願う。

くれぐれも、姉上にゆがみのこと、知られぬように」

「御意」

宗家の姫と、純潔の和子。

世界の宝ともいえる、この二人を守るために。

「牡丹様、御当代様は何と？」

「今一度、結界を張りなおしてくださいと。」

各家当主殿を迎えるゆえ、準備を・・・」

宗家筋に目通りできるのは、各家当主のみであるから、主家の姫の元に当主が出向くのは当然である。

「姫様には、くれぐれも歪みのこと悟られてはならぬとの仰せ。

当主殿たちも、表向きは宮様ご誕生のお祝いとしてまいられるだろう」

芙蓉の方は、鬼頭宗家一の姫。

いくら帝妃として降嫁したとはいえ、宗家の血を引く和子が誕生したのだ。

分家である鬼家の当主たちが祝いに訪ねるのは何ら不思議ではない。

「百合様には、もう？」

蓮姫に付いて、祝儀に参加している百合。

今回のことは、百合の指示だった。

「百合には私から話す。 沢谷は、各家より宮様の御祝いに参られる旨帝にお伝えして」

表殿 祝儀の間

一通りの祝詞も終わり、宴も酣。

太子彗羽の宮誕生の祝儀は、近年稀に見る盛大さで行われていた。

上座に座る帝の隣には、その腕に宮を抱く正帝妃芙蓉の方が座り、その手前には正室夕木の方と、椿姫が座っている。

正帝妃と正室が公の場で楽しげに会話に興じ、そこに時折帝も混ざる。

ある種異様な光景に初めこそ戸惑っていた出席者たちも、宴も酣になれば慣れたのか、会話に参加する者もでてきた。

夕木の方の実父、原木卿などは誇らしげに帝の近くに陣取っていた。

そんな様子を、奥戸から見つめる一人の男。

「やはり、何事もない、か・・・」

見つめる先には、美しいあの方。

「あの程度にしか歪みを付けられぬとは、さすが宗家御当代様、か」
忌々しい、と口元が歪む。

「しかし、神力のせいか、感知能力が低下している様子」

至上におわす、唯一の貴女。

「外が駄目なら、内から汚すまで・・・」

神力に包まれる蓮姫を見つめるその瞳は、一切の翳りは無い。

「愛しています・・・」

ただ、強い恋情だけを写し見つめるこの男は、宗家当代の結界を歪ませるだけの力を保持していた。

拾陸 鳴る神の音

東殿 白雪の間

彗羽の宮誕生の祝儀も終わり、帝は蓮姫と宮を伴って戻ってきた。宮を寝かせ、ようやく一心地着く。

百合たちは早々に下がり、帝と蓮姫、そして眠る彗羽だけの空間。

「夕木がえらく喜んでおった。椿を、彗羽の姉姫だとゆうたそうやな」

「はい。本当のことでございますしょう？ 彗羽の、たった一人の姉

姫にて、仲ようして欲しい、と」

すやすや眠る彗羽を撫でながら言えば、帝は苦笑する。

帝自身、別腹の姫や兄弟たちとは仲が良くなかった。

会話さえ交わしたことの無い姫も、中には顔を合わせたことの無い姫も居るぐらいなのだ。

いくら別腹の姫が一人とはいえ、椿は側室の子、彗羽は正帝妃の子、それも太子なのである。

椿姫が彗羽を大切にするのは当然で、わざわざ蓮姫がお願いをする必要はないのだ。

「夕木の方とも仲ようしとうございます。中庭での茶事も、お付き合いくださると」

それも楽しみだ、という蓮姫に、もはや帝は返す言葉も無い。

奥居に数多控える側室のうち、帝が抱いたのは数人。

その数人の側室も、二、三回お手がittedただけで懐妊すらしなかった。

嫡子を生んだ正帝妃と正室は、絶対権力を持つと同時に奥居の女

達の嫉妬を一心に浴びている。

自らが帝の子供を生むことを、奥居の女たちは諦めていない。
次期国母となることを、諦めてはいない。

それには、嫡子を生んだ正帝妃と正室は、邪魔な存在でしかない。
帝が奥殿に通わないのは、自分達を抱かないのは、この二人が居るからだ、そう言われているのだから。

生母の居ない和子など、いくらでも排除できるのだから。

そんな渦中の二人が中庭で茶事など、帝は心配でならない。

「予も、供に」

愛する妻と、子の母を、危険だと判っている場に出したくはないが、楽しみにしている姿も愛しく、行くなどとは言えない。

帝にしてみれば、妥協案だったそれも、蓮姫は笑って一蹴してしまう。

「まあ、白陽様には政務がございましょう。

夕木の方と彗羽と椿姫と、ほんの一時語らうだけにございます。

白陽様がいらしては、大事になってしまいますわ」

ころころと笑う蓮姫に、苦い顔の帝。

確かに、いくら奥居の中庭だといっても、帝もその場に居るのなら佐官の一人もつけなければならぬだろう。

そんな大事は嫌だと言われては、強引に出るとは言えない。

「わたくしたちの茶事のために、外室禁止など出されてはなりません。ぬ。

奥殿は、わたくしが暮らしていたときより鬼彗の結界で守られておりますれば、滅多な者は近づくことすら叶いません。

彗羽も神力で守られておりますれば、傷一つ付くことはございません。

百合も牡丹も相応に力は持っておりますので、椿姫も夕木の方も、危険はございません。

どうか、そうご案じなさいませんよう」

自分達の楽しみのために他の人に不自由をかけてはいけない、と言う蓮姫に、帝はもはや何も言えなかった。

「では、各家の当主殿がこちらへ？」

「ええ。 姫様には、宮様の誕生祝、とされるそうです。余計な心配はかけるなど、御当代様が」

控えの間で、今日の報告をする牡丹に、百合は驚きを隠さなかった。

まさか、全分家の当主を寄越すとは思わなかったのだ。

「帝にも、まだ？」

「はい。明朝、ご報告に上がろうかと・・・」

問われた沢谷がチラリと隣室を見る。

祝儀の後、帝と蓮姫は一緒に戻ったため、まだ報告できないでいるのだ。

「当主殿たちは、いつごろ？」

「明言はされませんでした、近日中には」

二、三日中には来るだろう、と言外にう。

鬼浬が、蓮姫のことを後回しにするはずがないのだ。

それがわかっているからこそ、報告は早くしたいのだが・・・。

「良い。 今、お二人にご報告する。 一度で済めば手間が無くて良い」

一刻も惜しいからこそ、強行。
三人は、控えの間を後にした。

「まあ、当主たちがこちらへ？」

「はい。御当代様より、宮様誕生の祝いに参りたい、との旨上奏されました」

百合の報告に、帝も蓮姫も喜色を隠さなかった。

「本来ならば、帝にお伺いしなければなりませんのに、勝手させていただきましたこと、御当代様より謝辞預かっております」

伏して述べる百合に、帝は顔を上げさせた。

「わざわざ鬼家の方々が宮を祝って下さるなど、これ以上の喜びは無い。こちらから御礼申し上げることにて、謝辞などんでもない。して、ご来訪は何時頃？」

鬼家の当主たちから祝詞を頂くなど、願ってもないこと。

この世の理を司る鬼家の祝詞は、世界からの祝福を得たことに等しい。

「宮様や姫様のご都合さえよろしければ、二、三日中には。」

明言はされませんでした。が、大事は宮様と姫様の体調にて・・・」

「宮もわたくしも、いつでもよろしい。当主達に合わせると伝えなさい」

祝いを受けるのは宮なので、こちらの都合を押すことはしない、と蓮姫が言えば、帝も同意して笑う。

「かしこまりました。そのようにお伝えいたします」

「彗羽は幸せ者やな」

三人が退室してから、ポツリと帝が言う。

「本当に。こうして皆から祝福され、彗羽は本当に幸せです・・・
なにより、こうして帝に可愛がって頂いているのが、一番の幸せ」
眠る彗羽を優しく撫ぜる帝に、蓮姫は言う。

最愛の妻が生んだ和子が可愛くないはずがない。

帝にしてみれば、世継が可愛いのではなく、蓮姫の子が可愛いのだ。

蓮姫が入内してから、帝の愛は蓮姫にのみ向けられている。

奥居に居る手付かずの側室などは見向きもせず、毎日蓮姫の待つ東殿に帰ってくる。

愛しくて、たまらない愛姫。

蓮姫が望めば、帝は何事をも叶えるであろうほどの、溺愛。

一国の帝が持つには、危険な感情。

ここまでは、理。

定められた、運命。

しかし・・・

狂いだした齒車と、歪みつつある、現実。

まだ、気づかれない、真実。

行き着く先は・・・

拾漆 春を寿く

東殿 広間

上座に座る、蓮姫と宮。

下座に控える、8人の男女。

蓮姫の正面に座するのは、鬼頭宗家当代、鬼頭鬼曄。

右側に、

鬼頭第一分家、火鬼家当主火晶

鬼頭第二分家、風鬼家当主利風

鬼頭第三分家、金鬼家当主金伯

左側に、

鬼頭第四分家、水鬼家当主水那

鬼頭第五分家、木鬼家当主木絡

鬼頭第六分家、土鬼家当主凍土

そして、末席に座る、鬼頭末席、九鬼家当主九景。

世の理を管理する、鬼家当主の面々が一同に会していた。

「姉上、お久しゅうございます」

形式ばった挨拶。

いくら当代といえども、実姉のほうが立場は、上。

それは、降嫁しても変わらない。

それに淡く微笑む蓮姫。

いまだ叩頭したままの鬼彗たちに、頭を上げさせる。

「皆、よう来てくれた。面を上げ」

帝殿での優しい雰囲気とは違う、支配者の、それ。

「姉姫様、お久しゅうございます。この度は太子様ご誕生、誠に喜ばしく存じます」

「何事も無くご出産あそばされましたこと、お祝い申し上げます」

「この後は、姉姫様と太子様に変わらぬ忠誠を」

口々に出る祝いを受け止め、鷹揚に頷く蓮姫。

傳かれることが当然のその様は、生まれながらに持つもの。

帝よりも、当代よりも高位である、証。

「火晶、刹風、金伯、息災で何より。そなた達の忠誠、太子にも届いております。」

水那、木絡、凍土。そなた達の助力あって、太子も無事。今後も変わらず太子に忠誠を」

言霊として贈られたそれに、当主たちは平伏す。

名は存在を縛り、言霊は魂を拘束する。

力ある者の言葉は、それだけでその効力を発揮する。

。「百合や牡丹に、神力が足らぬと聞いたときは心配しましたが・・・。

彗羽の元気な姿に安堵いたしました。姉上もお元気なご様子。本当に良かった」

鬼彗が宮の名を呼べば、宮は嬉しそうに声を上げた。

「さすがは鬼頭純血の和子様。神力に守護されながらも、既に理を理解していらっしゃる」

刹風が自身の風によって伝えられる理に、宮が反応する。

「姉姫様、神水は足りておりますか？　これだけ力の強い太子様の乳を御自ら与えられるには、神力が不可欠にございます」

「左様。いくら御当代様の結界内といえど、姉姫様の神力が落ちてはなりませぬゆえ、お気をつけください」

水鬼家当主の言葉と木鬼家当主の言葉に、蓮姫は頷く。

「彗羽が神水を好み、よう口に。香にも神木をくべる。

日々強くなっていく彗羽の力に、守護が追いつかぬ様子・・・」

ほれ、このように、と宮のおくるみをずらせば、神木を抱きかかえる宮。

「このように神力が足らぬ状態では、彗羽はもちろん姉上の身にも大事・・・」

姉上、ちょうど皆が揃っております。結界を張り直し、神力を満たしましょう。

全てを風で払い木は火を生じ、火は土を生じ、土は金を生じ、金は水を生じ、水は木を生ず。

水は火に勝ち、火は金に勝ち、金は木に勝ち、木は土に勝ち、土は水に勝ち、風は全てを納める」

居住まいを正した当主たちが、鬼彗の呪に応呼しその力を放出する。

「表殿、奥殿、東殿、姉上と彗羽の立ち入る全ての帝殿全てを包め内からの穢れも許さぬ」

対象は、帝殿全体。

その広大な範囲を、東殿の一室から出ることなく結界を張り直すという。

最高位の力を保有する者だからこそ、その行動力。

障も器も依り代すら必要としないそれに、蓮姫はただ微笑みを湛えて見つめる。

「張り直しが始まった・・・」

「これで、あの歪みをつけた者が見つかれば良いが・・・」

隣から放たれる神力に、控えていた百合と牡丹がもらす。

歪みのつけられた東殿の結界を、張り直すための、今回の会見。本来の目的を果たすべく、始まった、修復。

「大事は、姫様の御身・・・」

「左様。唯一至上の御方にて、一分の隙も許されぬ」

何を捨てても守らねばならない、至宝のために。

表殿 政務の間

帝と文官、そして糸桐が政務を行うこの部屋では、帝が火急の案件に追われていた。

本来ならば、蓮姫や太子とともに鬼家の当主たちと会見するはずだったのだが、地方より食糧不足の知らせが入り、急遽政務に借り出されていた。

「はじまった・・・」

皆が慌しく働く中、糸桐がポツリと呟く。

隣に居る帝は、他の文官と話していて聞こえない。

「あの歪みに、気付かぬはずはないと思ってはいたが・・・まさか、当主全員で復旧に当たるとは・・・」

それほどまでに、和子が・・・いや、姉姫が、大切な」

毒づくように漏らされる糸桐の声に、やはり、誰も気付かない。

「しかし、ここまで大掛かりな結界を張られては、内から汚すのも無理、か・・・」

他の手を考えなければならぬ、と思案する。

末席の者とは思えぬほどの力を有し、いま、その力を向けようとしている。

「私は、ただ一人、貴女が欲しい・・・」
恋焦がれるのは、地上の至宝。

「そのために、あの女も利用したのだから・・・」
帝の寵を頂くあの女に手を出したのも、貴女を得んがため。

「たかがあの程度の女に、如何こう出来るとは思っていないが・・・」
失敗するのは、予想の内。

「しかし、予想以上に当代殿の対応が早かった・・・」
そのうえ、式ではなく、当代始め当主自らが参内した。

「やはり、式を持っているか」
貴女とアレを、繋ぐモノ。

「忌々しい・・・」
見せ付けられる、強いキズナ。

「私だけのものに・・・」
唯一無二の至高の存在を手にするために。

「神力が満ちてゆく・・・」

御当代様の御力のみで守られていたこの殿が、理全てで守られる・

これで、姫様も宮様も心安らかに過ごされましょう」

退室していた沢谷が戻り、開口一番の言葉に、牡丹が返す。

「内からの歪みと汚れ・・・。此度の張りなおしで修復は出来ても、解決には・・・」

いくら式を通した結界とはいえ、御当代様の地気結界に歪みをつけ、守護結界を汚し、二条の方に呪を与えた者を捕らえなければ・・・」

神妙な牡丹の言葉に、百合が言う。

「確かに・・・。」

しかし、だからこそ、此度の張り直しは必要だった。全て御当代様の手の内なれば、一転のシミも見逃さぬ。

邪呪ならばすぐに片がつくはず。ここまで時間がかかるのは、同種の呪、か・・・」

張り直しが始まって、どれほど時が経ったのか。

百合の言葉に反応したのは、沢谷。

「まさか、鬼家の地を引くものが裏切りを？」

しかし、御当代様と同等位の力を持つものなど、存在せぬはず」
絶対的な存在である当代を裏切るなど、正気ではない。

「第一、鬼家は総じて、鬼頭本家の血にございます！！」
沢谷の、絶叫。

『親』が『子』を選ぶ鬼家では、裏切りなどあり得ない。

「沢谷。口を慎め・・・」

まだ、始まったばかり。これから、何事が起きるのか・・・」
静かな百合の叱責に、沢谷は口を噤む。

「和子様をお守りするのは当たり前。それよりも、姫様第一」
特殊な鬼家だからこそ、彗羽の宮よりも蓮姫を第一に考えなければならぬと牡丹は言う。

「全ては、ここから・・・」

御当代様始め、当主たちに任せるほか、ない」

拾捌 散り交ひ曇る紅

奥殿 中庭

「まあ、では、帝は宮様を泣かせておしまいに？」

「ええ。大慌てで宮をあやして、沢谷が帝をおしかりに」

ころころと笑う蓮姫につられるように、夕木の方も笑う。

暖かな日差しの中、木陰で、夕木の方と茶事。

蓮姫の隣では宮が寝かされ、椿姫があやしている。

奥居頭の水波が直々に側に控え、百合が蓮姫の、牡丹が宮の護衛を務め、夕木の方の女官も側に控えている。

蓮姫の願いにより外室禁止の令は出ていない。

そのため、他の側室や女官たちの姿も見られるが、必要以上に近付く者はいない。

皆、奥殿最高権力者の夕木の方と、正帝妃芙蓉の方に気遣い、邪魔することは無い。

余談であるが、今朝、帝はこの茶事への出席を口にし、蓮姫と沢谷の局に窘められている。

「椿姫、その櫛、御使いくださっておりますのね」

椿姫の髪を飾るのは、蓮姫が祝品に贈った柊の櫛。

高い位置で結わえられた髪を、美しく飾っている。

「はい、椿のお気に入りで、あれでなくては嫌だと毎日。眠るときも枕元において、片時も側から離しません」

私にも触らせてくれない、と夕木の方が笑う。

「気に入っていただけているのならよろしゅうございました。邪気から椿姫を守る櫛にて、御身より遠ざけられることのないようにしてくださいませ」

楽しげに宮をあやす椿姫の髪に触れれば、笑顔を返される。

帝妃が正室の子に触れるなどと考えられないことであるが、蓮姫にそれを気にした様子は無い。

触れた瞬間、息を吞む声が聞こえたのは、どこからだったか。

穏やかに微笑む蓮姫と、無邪気に笑う椿姫。それを見守る夕木の方は、まさに理想の関係といえるだろう。

そんな穏やかな空間を、打ち破るようにかかった声。

「御帝妃、芙蓉の方様。御正室、夕木の方様」

しずかに響くその声に、反応したのは水波だった。

「糸桐殿・・・ 何用です」

かけられた声にふりむけば、帝より若い男が1人。
叩頭しているため顔は見れないが、声からそう判断する。

帝妃と正室の身分に遠慮して皆が遠巻きに見る中、まだ年若い男が声をかけるなど、一体どういうつもりなのか。

その姿は佐官にも見え、また、この奥殿の関係者にも見えない。
奥居頭の水波がその名を呼んだことから、慮外者ではないらしい。

しかし、この男。
まったく気配がしなかった。

これだけ近くに居るにも関わらず、声をかけられ、その姿を認識するまで、まったく気配を感じなかったのである。

その事実蓮姫が百合と牡丹に目を向ければ、2人も警戒を強くしていた。

一定の距離から近づいてこない男を、見つめる。

「そのほう、名は？」

言い知れぬ不快感に、蓮姫が声をかける。

「失礼いたしました。九鬼糸桐、と申します。お方様方には初めて御目通りいたします」

叩頭したまま告げられる、九鬼の名。
その名に、百合と牡丹が目を見張る。

鬼家の末席にすぎない九鬼の者が、百合や牡丹、まして蓮姫にすら気配を悟らせず近づくなど、不可能であるはず。

「九鬼の者が、何用かえ？」

「帝の補佐を務めさせていただいておりますれば、帝からの御言伝預かった参った次第にございます」

蓮姫の言葉にすら揺ぎ無い姿に、不信感だけが募っていく。

鬼家の者が宗家の姫に直接の御声がけをいただくなど、その場に平伏して当然のことである。

にも関わらず、九鬼糸桐と名乗ったこの男の態度は……。

「して、帝は何と？」

1歩近づいた水波が問えば、糸桐はやっとその顔を上げた。

「式切!!」

その顔を確認した瞬間、百合から発せられた驚愕の声。

幸い、その声は誰の耳に届くことは無く。

「お方様と和子様と、食事をともに、とのことでございます。

政務もそろそろキリが付きますれば、東屋にてお待ちいただきました
い、と」

もともと、夕木の方との昼食までを予定していた今回の茶事。

そこに、帝も混ざる、という。

御茶は断られたので、せめて昼食を、という帝の言葉に、蓮姫は夕木に方と顔を見合わせ、笑う。

「帝に、お待ち申し上げております、とお伝えなさい。芙蓉の方様と、宮様とともにお待ちしております、と」

夕木の方が糸桐に言えば、糸桐はもう一度叩頭し、下がっていった。

「帝も困った御方。今朝もお断りいたしましたのに」

クスクスと笑う蓮姫に、夕木の方も笑う。

「宮様もご一緒ですゆえ、ご心配なのでございましょう」

本来ならば、次期帝は東殿から出ることなく過ぐす。

奥殿には、側室、すなわち、次期帝が邪魔だと思ふ女たちの巣窟。そのような女たちの暮らす奥殿での食事など、命を狙ってください、と同義である。

帝が心配するのも無理はない。

もっとも、彗羽の宮には鬼家の守護があるため、その命を奪うことは何尾乳も出来ないのだが、それはそれである。

たとえば彗羽の宮が亡くなっても、この奥殿に数多いる側室の誰一人として帝の御手が付くことはないのは、帝自身によって公言されている事であるのだが。

しかし、そうであるにも関わらず、奥殿より誰一人として退去しな

いのは不思議である、とは帝の言である。

食事の支度が整った、という女官の言葉に、東屋に向かうべく蓮姫たちは席を立つ。

そつと離れていく百合に、誰一人として注意を払うことはない。結界で守られている奥殿では、牡丹一人で十分事が足りる。

百合が向かう先は、東殿。

顔色悪く向かう向かう行く手を、阻む者が、1人。

「・・・式切りが、何用か」

「やはりご存知でしたか。鬼頭の百合様」

警戒も顕わな百合と対峙する、式切り、と忌々しく呼ばれた、糸桐。

くつり、と嗤うその顔は、先程とは違い、嬉しそうである。

「御当代様の式切りが、ここで何をしている？ 九鬼から出られぬ身であろう」

常とは違う、百合の低い声。

それを気に留めることなく、どこまでも楽しげな、糸桐。

「御心配には及びません。九鬼の地下牢には、式を置いてきてあります。」

御当代様とお気づきではありません。・・・ああ。御当代様

は、元々私をご存知ではありませんね。
九景様も、と訂正いたしましょう」

この楽しいげな様子が、百合の神経を逆撫でする。

「今一度問う。」

式切りが、ここで、何をしている？」

深く、沁みこむような声音で問う百合に、しかし糸桐は、ただ、
囁う。

「無駄ですよ、鬼頭の百合様。いくら貴女でも、言呪は私には効き
ません。」

お忘れですか？ 鬼頭の百合様より、私のほうが力は上です」

詠うようにかわされるそれに、百合は顔を歪めた。

「……数々の怪現象を引き起こしたのは、うぬか……」

「怪現象などと、とんでもない。私は、自分の求める者に忠実なだ
け」

何の力も籠められていない糸桐の言葉。

しかし、百合はそれに囚われる。

「私は、この世の至上が欲しいのです」

とろりと甘い、蜜のように。

「御協力、いただけますね？ 鬼頭の百合様」

意識を犯す、甘い罠。

鬼頭宗家 星占の間

身体機能が停止したかのような錯覚すら起こす静寂。
何もない、光すら届かない外からの流れ一切を遮断した空間。

その暗闇に座するのは、世界の具現である鬼頭宗家の当代、鬼棼。
その身が依代であるがゆえに、その存在が具現であるがゆえに、
かかりすぎる負荷を、昇華する。

理すらないこの空間で、無となり眺める、世の流れ。

流れる理に集中すれば、そこに見つけた、小さな、染み。

付く筈もないその汚点に、その集中を、向ける。

「蓮華・・・？」

決して許されない、事態。

最愛にして至上の存在に付いた、染み。

深く、深く、入り込む、闇。

流れる理と、刻まれる、時。

まわりゆく、ちから。

汚されつつある、絆。

狂わされる、齒車。

歪まされる、真理。

まわる、まわる、意識の、外。

沈み込むのは、
・
・
・
。

拾玖 常影に募る

東殿 白雪の間

帝と共に昼食を済ませ、午眠のために戻れば、そこに百合の姿は無かった。

「牡丹、百合はどないしました？ さっきから姿がみえん・・・」

基本、百合や牡丹は蓮姫の側を離れることは無い。

鬼彗の結界で守られているとはいえ、悪意の無い災いはある。

それらから連呼を守るのが百合と牡丹であり、蓮姫の身の回りの世話をするのもこの二人である。

特に、今は彗羽の宮の世話もあり、長時間離れることはなかった。

「少し外す、とそれっきり・・・ てっきり、先に戻っているものと思いましたが・・・」

「百合様は、一度もお戻りではございません」

チラリと沢谷に視線を向ければ、沢谷も困惑気味に答える。

探しに行かせるべきか、と蓮姫が口を開きかけた時・・・

ピーーッ

青玉が、啼いた。

空気を劈くような、高音。

鬼彗の式である青玉の、常に無い鳴き声に、蓮姫は宮を抱き、牡丹はその背に蓮姫を庇う。

籠の中で暴れ、啼き止まぬ青玉。

沢谷が鳥籠から青玉を開放すれば、そこに現れたのは・・・

「鬼彗・・・？」

開放された青玉が、鬼彗の姿をとる。

式を通じての、力の解放。

実在ではないが、限りなく近い、存在。

鬼彗はふわりと彗羽の宮ごと蓮姫を抱き込み、唇を合わせた。

「ん、ふう・・・ん」

そこから直接送り込まれる、護呪。

蒼白い光が蓮姫を包み込んだ、ちょうど、その瞬間。

入り口の襖が開け放たれた。

「百合・・・！！！」

そこに建っていたのは、百合。

その瞳は、うつろ。

焦点を結ばぬ、視線。

「遅かったか・・・」

鬼彗から漏れる、声。

異質な空気。

場に満ちる、不快感。

その中心に佇むのは、百合。

「どうやって・・・？」

ここは、鬼家の結界内。

蓮姫と慧羽の宮を守るためだけの、空間。

そのためだけに作られた、鬼慧の箱庭。

その、もっとも安全であるべきはずの場所に入り込んだ、異質。それも、百合が、何者かに操られている。

「一体、なにが？」

腕に抱いた宮ごと鬼慧に抱き込まれ、蓮姫は百合を見る。

「傀儡となっております・・・わたしの結界内で、このような忌々しい、と吐き出される鬼慧の言葉。

「牡丹、百合はいつからおらんくなった？」

「東屋に向かう途中で離れました。それっきり・・・」
離れていたのは、ほんの二刻ほど。

その間に、一体何があったのか・・・

「鬼慧の結界内で、傀儡の術を使える者、か・・・」

「それも、百合を相手に、です。百合にも護符を持たせてありました。」

それが、何の反応も示さない。結界にも、綻びすら、ない」
不愉快だ、と顔を顰める鬼慧。

鬼家宗家、鬼頭家当代の地位は、その生まれのみで継げるものではない。

特化した理の力を持つ各家当主たちを押さえ込み、御せるだけの強い力を持つ者でしか、その地位を継ぐことは出来ない。

全てにおいて、頂点である、その力。

その力で守られた、この箱庭。

有得るはずの無い、この異質なる現状。

「目的がわかりませんなあ・・・ 宮の命か？ わたくしの命か？」

ひたり、と見つめる百合の姿。

その姿は、ただの傀儡。

そこに、何者の意思も感じるとは出来ない。

「牡丹、下がれ。百合を縛につける」

正氣に戻す必要がある。

傀儡の術を施すには、直接対峙する必要がある。

百合に術をかけたものを、知るのが先決。

「姉上、彗羽と、そこを動かせませんように」

鬼彗の言葉に頷き、しっかりと宮を抱えなおす蓮姫。

そこには、いつの間にか護術の陣が施されていた。

「呪縛の鎖、地縛の戒め、術縛の獄」

鬼彗の呪術。

蒼白く輝く、その力。

東殿を覆っていたその力が、鎖となって百合を縛る。

東殿 中庭

白雪の間を見つめている、ひとりの男。

「やはり、馴染まぬか・・・」

本来ならば、こちらの駒にするはずだった。

「さすがは、鬼頭の百合様・・・」

至上のあの貴女を、守るためだけの、存在。

「しかし、程度がわかっただけでも、良い」

まったく効かないわけではなかった、己のチカラ。

ふと、視界を遮った、存在。

鮮やかな、蒼。

平伏したくなるような、絶対的な、強い、蒼白いチカラ。

「早すぎる・・・」

間違ふことの無い、忌々しい、相手のもの。
しかし・・・

「これで、当代の知るところとなる」
やりにくくなるのは、承知の上。

「貴女にも、知っていただける・・・」
恋焦がれる貴女に知ってもらえる、その、喜び。

「やはり、御美しい・・・」
間近にまみえた、至福のトキ。
全身を駆け抜けた、あの、愉悦。

「我が手に抱ければ、どれほどの・・・」
沸き起こるのは、激しい、劣情。

「次の一手は・・・」
考えるのは、ただ、貴女のこと。

「そのためには・・・」
神にすら、逆らおう。

式拾 幸い人の涙

東殿 白雪の間

腕に抱く宮をそのまま、鬼彗の腕に囲われた蓮姫。

その目前には、伏して叩頭する、百合の姿。

百合を傀儡にしていた術も敗れ、正気を取り戻した百合が、事の経緯を説明していた。

「では、あの者が・・・？」

信じられない、といった蓮姫の声に、百合はただ沈黙する。

本来ならば、告げることの許されない、それ。

理の闇ともいえる、影。

宗家当代が唯一知り得ない、隠されるべき、存在。

しかし・・・

「あれが式切、当代の影、か・・・？」

鬼彗とは似てなんだなあ、と言う蓮姫に、百合は瞠目する。

「・・・影を、ご存知でございましたか・・・？」

知られざる存在、隠すべき闇。

生まれたその瞬間から影として生きることの決定した、当代の式切。

九鬼家の当主がその一切を管理し、生涯を地下牢獄から出ること

の許されない、その一生。

宗家すら知らぬはずの、秘密。

それを、蓮姫は、宗家の至宝は、知っている、と言うのか。

「わたくしは、鬼頭の長子。当代の実姉にして、唯一の妻。理で縛られし存在。知らぬことの許されぬ、身」

詠うように告げられたその言葉に、百合は深く嘆息する。

「では、御当代様、も？」

蓮姫が知っているのなら、鬼桰も当然知っているのではないか、という確認。

「歴代、そういった存在があった、という事実は認識している。しかし、わが身の『影』を認識してはいない。その存在を感知することもできぬ」

それは、理に反する存在。

存在すら組み込まれぬ、異質。

理を知る存在だからこそ知り得ない、闇。

しかし、それを認識しているという鬼桰。

歴代随一と言うその力は、伊達ではない。

「このまま、というわけにはいきませんなあ。百合、式切の望みはなんや？ 当代の地位か？」

問われて百合は、びっくり、と震える。

「……姉上、か？」

問いにしては断定的な鬼彗のそれに、百合はただ頷くことしかできなかった。

表殿 政務の間

帝が忙しく働くその横に、糸桐の机も置かれている。
今上帝の右腕、補佐を務めるのは糸桐だけであった。

鬼頭の末席である九鬼の名を持ちながらも、いや、持っているからこそ、その地位に就いている糸桐。

歴代の帝には、九鬼の名の者が多く関わってきている。

その長い歴史の中で築いてきた、皇族と九鬼家の繋がりは、九鬼の名を持つ糸桐を無条件で信用させるほど強いものであった。

「糸桐、どこに行っておった？」

昼食後から姿の見えなかった己の片腕に、帝は声をかける。
ふらりと姿の見えなくなる糸桐だが、ここまで長い時間側を離れるのも珍しい。

「申し訳ございません、帝。旧知の者と少々長話をしておりました」
「ほう。鬼家の方か？」

糸桐の珍しい言葉に、帝は興味をひかれる。

糸桐に、長話をするような知人がいるとは帝は知らなかった。

帝の知る九鬼糸桐、という男は、特定の誰かと長話などする男ではないのだ。

何でもそつなくこなすが、どこかその存在感は希薄である。

「はい、昔馴染みでございます。まさか、あの方が私をご存知だとは思いませんでしたか・・・」

珍しくその表情に歓喜を浮かべる糸桐に、ますます帝は興味をひかれる。

「誰や？ 糸桐がそう言うもの珍しい」

「百合様です。芙蓉のお方様の女官を務めていらっしゃる、鬼頭の百合様・・・」

とろりと、その名に呪を乗せて、発する。

「百合か・・・ そうか、糸桐は百合とは昔馴染みか・・・ ご存知だとは・・・？」

どこかおかしい、糸桐の言い回しに、帝は首をかしげる。

「お互い、一方的に認識しているにすぎない、と思っていたのですよ」

ますますわからない、といった表情の帝に、糸桐はただ、笑う。

「直接まみえた事など無かったのですよ。百合様は、ずっと、あの方の御傍に控えていらっしゃったのですから」

くつくつと、嗤う糸桐。

「あの、至上の方を、御守りする、ただそれだけの、存在」
「至上の・・・？」

常に無く饒舌な糸桐に、ただただ帝は首をかしげる。

「ええ、至上のあの方・・・この世の、至宝・・・」
とろりと、甘い、声音で。

「私の、大切な、至宝です」

有り余る力を、その声に、乗せる。

「帝・・・私の、あの方を、抱いてください」

傀儡として、使うために。

「あの方に、和子を・・・」

長い、永い時間を、かけて、きたのだから。

「帝の本当の和子を、あの方に、身籠っていただきましょう・・・」

こ
の
世
の
理^{ことわり}
を
、
狂
わ
せ
る
た
め
に
。

式拾巻 聞き恋ふ山彦

東殿 白雪の間

影の存在が、明るみに出てより、数日。
白雪の間に、あり得ない事態が、襲う。

夕刻に指しかかろうという時刻。そこにもたらされた、表殿より
の通告。

「なんと——!!」

信じられないという沢谷の声が響く中、蓮姫はどこまでも落ち着
いていた。

「相手は？」

「第十一側室、麻姫様だそうです」

牡丹の報告に、蓮姫は首をかしげる。

「知らぬ名やなあ。どこの姫ですよ？」

奥殿、紅の間に居たとき、目通りをしなかった側室が数人いた。
第十一側室も、その中の一人。

「先々帝の姉姫が降嫁した先の末の家の者でございます」
「なんとう・・・ 皇家縁の者か？」

沢谷の言葉に、牡丹が返す。

「まさか。皇家の血を頂いたといっても、四代も前のこと。第一、この麻姫には一滴たりとも皇家の血など流れてはおりません」

「ほう？ 麻姫は外の血か？」

どこか不快そうに言い募る沢谷に、面白そうに返す百合。

「いいえ。当主が外の血でございます。現当主の正妻が直系。現当主は婿養子。正妻に子が出来ず、麻姫は側室の腹。下賤者でございます」

家名を誇るしか能の無い下賤者だと吐き捨てる沢谷。

その家名すら、最近は地に落ちていと言う。

「その下賤者の室に、本日帝は御泊り、と……。姫様、何ぞ嫌な予感がしますなあ」

ふむ、と思案顔の百合。

「家名しか誇る物の無い下賤の姫なら、何としても帝の御子が欲しいですやろし……」

そんな欲に塗れた心は、闇を引き寄せ飲み込まれるいいますし……」

牡丹も、そう言って心配そうに蓮姫を見る。

影である糸桐の存在が明らかになった今、何が起こるかわからない。

現に、帝はあの日より、糸桐の力を纏ってこの白雪の間に帰って

きている。

帝の身体に纏わりつく糸桐の言霊。

力ある者が意識して発する、言葉という呪。

蓮姫に、帝の子を宿すという、理を狂わせる、呪い。

飽きもせず、毎日かけられてくる言霊に、百合たちは忌々しい、と怒りを顕わにしている。

鬼彗の結界内で、当然のように力の行使を行う影を、止める事はできない。

「影は、帝の右腕やったか……。今回も、何ぞ仕掛けてきはるやろうなあ……」

しかし、蓮姫は、楽しそうに、ただ笑う。

「下賤の姫の一人ぐらい、奥殿から消えてしまっても、だあれも困らしませんかあ……」

さも楽しそうに、その言葉に、力を、乗せる。

「姫様、御自らそのような事を……」

その力の流れに、牡丹が言う。

「構いませんやろ……。いくら影とて、わたくしの力は止められぬ」

影は、鬼・・・の影なのだから。

奥殿 紅の間

「夕木の方様。本日、帝は麻姫さまの室に御泊りとか・・・」

帝奥泊まり、の布令から慌しく動き出した奥殿。

その騒ぎに、奥居頭の下へやっていた女官がもたらした知らせに、夕木の方は言葉を無くした。

正帝妃として芙蓉の方を迎えてから、奥殿に住む数多の側室の、誰の下へも通わなくなった帝。

芙蓉の方がその居を東殿に移してからは、この奥殿に足向ける事すらしなくなった。

唯一の例外は、自身の生んだ一の姫である椿姫のご機嫌伺いに来るだけだった。

そんな帝が、事もあるうに、た・・・の側室の室に泊まる、と言う。

「何かの間違えではないのか？ 帝は、こちらに泊まることなどなさらないはず・・・」

それは、帝自らが言った言葉。

「いいえ。水波様から、しかと。本日、麻姫様の室泊まり、と」

間違いではないという女官に、夕木の方は再び言葉を失う。

第十一側室、麻姫。都貴族、井村家の一の姫。

四代前の当主に帝妹が降嫁したが、今ではその血も薄れ、それほど発言力があるわけでも、皇家との誼が強いわけでもない。

そんな家の出にすぎない麻姫。しかも、本人には一滴も皇家の血など流れていないという。

夕木の方が入内して、三ヶ月後に入内したが、これまで一度も御手が付くどころか御声がけすらなかった麻姫。

そんな、ただの側室のところへ、今更何故、と疑問が過ぎる。もっと有力な家の姫も、美しい姫も、多数控えているのに。

「水波をこちらへ」

事の真意を、確かめる必要が、ある。

夕木の方は、この奥殿の正室。

唯一、帝の御子を生んだ、妻なのだから。

式拾式 冬にうらぶる

奥殿 麻姫の室

薄暗い、その部屋に。若竹色の内掛けを纏う、姫が一人。

己の室を見張る、他の側室の女官の気配を欠片も気にするそぶりも無く、ただ、静かに一人、そこに、在る。

その姿からは、“生”というものを、感じる事が、できない。まるで、人形のように。その入れ物に、魂が入っていないかのよう。

ただ、そこに、在る。

「やられた、か・・・」

何も無いはずの空間から。暗い、闇の中から。突如響いた、声。ぴしり、と空間を歪ませるその声に、しかし、ピクリとも反応をしない、姫。

「この色は、あの貴女^{かた}の、力・・・ そうか、あの貴女が、直接」

くつりと、どこか喜色を滲ませて響く、その声は。

「知っていただけだからこそこの、この、妨害・・・」

ぐにやり、と。 “影”が、形を、変える。

「言葉の呪い・・・ これは・・・」

影より現れたのは、人型。

「あくまでも、わたしの存在を、隠されますか」

だんだんと明確になる、人の、かたち。

「次の一手は、貴女からいただける・・・」

なんと甘美なことか、と。嗤うのは。

「待ち遠しい・・・」

歪んだ、愛に生きる、道化。

掻き消すように、晴れた、闇。

そして、空間を裂くような、女の悲鳴。

薄暗い、部屋の中に入り込んだのは。
懐刀を手にした、鬼。

そこに在る存在を気にすること無く。
まっすぐに、麻姫のみを、見つめる。

醜悪に歪んだその顔は。見覚えが、あった。

「和姫、か・・・？」

ぽつりと漏らされた自身の名にも、意識を向けることは、無く。
ただ、ただ。麻姫に、向かう。

「あの貴女^{かた}の、呪、か・・・」

くつり、と嗤う。

「まさか、二重とは・・・」

おもしろい、と、目の前の光景に、見入る。

奥殿に住む全ての女が敵である中。

唯一、麻姫と仲の良かった、和姫。

都貴族の二の姫で、その身に、僅かだが皇家の血をいただく、麻姫と同格の家の出である和姫。

同じような家の格、同じような歳、そして、同じような次期に入内したことから、何かと交流があったらしい、二人。

「そんな、和姫を、お使いになられる、か・・・」

どちらも、使いやすい闇を、その身の内に秘めていた。
そこを突いたのは、自分も、同じ

「下賤の身でありながら・・・」

唸るように漏れる、和姫の、言葉。

それは、どこか獣じみっていて、人間のそれでは、ない。

「卑しい身に、寵は似合わぬ・・・」

ただそこに座る、反応もしない麻姫に向かい、唸る。

「尊き血は、妾の身に、ある・・・」

ゆっくりと、その懐刀の鞘を払い。

「汚らわしいその身は、いらぬ・・・」

言いながら、刀身を、振り下ろす。

何度も、何度も。

まるで、何かに憑依されたかのように、ただひたすらに、物言わぬ麻姫を、刺し殺す。

麻姫の身体が倒れても。

何度も、何度も。

その全身を、刺す。

「狂気と狂喜の、狭間、か・・・」

そんな、和姫の姿に。

愉悦を滲ませ、“影”は、嗤う。

「か・・・和姫様!!!!」

悲鳴を聞きつけ、やって来た水波が見たものは。

見るも無残に刺し殺された、麻姫であつたであろう、肉塊かたまりと。

「これでよい・・・この下賤者になど、寵は渡さぬ・・・」

狂ったように晒う、全身を赤黒く染め、血の海に座る、変わり果てた、和姫の、姿。

東殿 白雪の間

「壊れたか・・・」

自身の力の糸を追っていた蓮姫の口から漏れた、その言葉に。側に控えていた、牡丹が笑った。

「下賤の血で、御当代様の結界が汚れてしまいましたなあ」

徐々に騒がしくなる奥殿の音を聞きながら、百合が開けていた障子を閉めた。

「あの影も、気付いたようですね・・・」

くすくすと笑う蓮姫に、百合も牡丹も、ただその笑みを濃くする。

「これで影がどう出る、か・・・」

ただの御遊びでは、済まさないだろう。
それよりも・・・

「帝は今夜、どないされますのやろ？」

出されている、奥泊まりの布令。
しかし、奥殿は今、それどころではない。

「この時間ですし、あの騒ぎや。数日間仕事に追われますやろな
あ・・・」

奥殿どころか、表殿から数日は出ることすら叶わないだろう、と
言う蓮姫。

その声には、楽しげなものが含まれている。

「姉上・・・」

呆れたように響く、声。その、発信源は。

「鬼彗・・・」

入り口に佇む、鬼彗の姿。

式ではなく、本物の鬼彗に。平伏す、百合と牡丹。
それをまったく気にとめずに蓮姫の元に進み。
そして合わさる、唇。

「あまり、ご無理をなさらないでください・・・」

強く抱かれる、その、腕の中。

久方ぶりの、鬼彗の熱に。

蓮姫は、淫蕩に、微笑んだ。

貳拾参 歌めく声

表殿 政務の間

奥殿の騒がしさがうつすらと届く中。
ゆらり、と揺れる影が、漂う。

与えられた執務机に座る糸桐に、その影が、吸い込まれるように、消える。

「さて、どうしたものか・・・」

閉じられていた瞳を開き、口にする言葉は。
その内容とは裏腹に、どこか、楽しげで。

「帝・・・白陽帝」

この部屋の主・・・帝に声をかけ、覚醒を促す。
ビクリ、と。微動だにしなかった帝の体が、揺れる。
だんだんと、光を取り戻す瞳に、視線が、絡む。

「大丈夫ですか？」

常と変らぬ声音で問えば。

「糸桐・・・何ぞあったんか？」

帝は、その平常を、取り戻す。

「少々、奥が騒がしい様子ですが・・・何事かあれば、知らせが入りましょう」

異常を少しも悟らせることなく。日常に、移行する。

鬼彗によって張られた結果以内で行われた、術の行使。
しかし、そこに、綻びは、ない。

「麻姫の次は和姫だったか・・・今まで気にも留めなんだが、どれだけ不要の女がおる？」

手元の書類を眺めながら帝が言えば。

「さて・・・側室様だけでしたら、三十人少々ではございませんでしたか？　その他、端女まで入れれば、五十人弱でしょうか・・・」

淡々と返される糸桐の返事に、帝はうんざりとしたように溜息を吐く。

「よくも、これほどまでに入れたものや・・・」

書類に書かれている名前を、一つつつ、消していく。

「許可を出されたのは帝でございましょう」

文句を言う帝に、糸桐は苦笑する。

今、帝が手にしているのは、奥殿に暮らす女たちの名簿。
政治的関与の無い者から、下げ渡しを行うのだ。

「芙蓉以外はどうでもよいと、好きにさせた結果がこれ、か・・・」
今、初めて名前を知る女も居る、と言う帝に、糸桐は何も言えない。

奥殿で帝のお渡りを待つ女たちが聞けば、なんとするか・・・

「帝！！ 帝！！ 失礼いたしますっ 奥殿にて第十三側室和姫様が第十一側室麻姫様を刺殺ー！！」

バタバタと慌ただしい足音と共にもたらされた報告に。

「本日の奥泊まり、行かれる理由が無くなりましたね・・・」

糸桐は、帝を見て、笑う。

己の奥殿に住まう女たちの、奇行ともいえるその報告に。

「なんや、二人片付いたか・・・」

何の感慨もなく、帝は、呟いた。

鬼桰の腕に囲われ、その身を至福と委ねる蓮姫と。
最愛の女をその腕に囲い、久方ぶりの逢瀬を楽しむ鬼桰。

奥殿での喧騒が嘘のような、静寂の中。
ただただ、愛を交わす、二人。

「一体、何をなさったのです？」

サラリとした肌の感触を楽しむように滑る鬼桰の手の感触に。
すると、素足を絡ませる。

「何も・・・ただ、邪魔な姫を消しただけ・・・」

その繊細な指先を。

愛しい男の、指に、絡める。

「言霊を使い、操った？」

己の指に絡まった繊細な指先に。
愛しげに、口づける。

「ふふ・・・ただ、願っただけ。『麻姫を憎む者が殺せばよい』
と」

絡めた素足に力を込めて。
愛しい男の、自由を、奪う。

「影の術中だったのでは・・・？」

手触りの良い髪をサラリと梳いて。

あらわになった首筋に、唇を、寄せる。

「影は、鬼彗の、影……。わたくしの、影では無い……」

緩くもたらされるその快感に。

己のすべてを、委ねる。

「貴女を害なす事は、無い、と？」

形の良いその耳朶に。

舌を這わせ、甘く、噛む。

「わたくしは、鬼頭の姉姫。この世の理の、唯一の具現者」

覆いかぶさるように抱きしめる男の腕の中で。

甘く、甘く、囁く。

「我が最愛にして唯一の妻。この世の秘宝」

抱き寄せた愛しい女の体を。

壊れぬように、ほぐす。

「はぁ……。次は、姫が欲しい……」

ねだるように囁かれる、その言葉は。

「貴女に似て、とても美しいでしょう。しかし……。まだ、その時ではありません。すべては、理の中に……」

焦らされる手によって、叶えられることは、ない。

「慧羽の、至宝を・・・

て・・・」

囁かれた、言葉は。

理の中に、消えて、無くなった。

貳拾肆 あらまし事

表殿 政務の間

奥殿からの知らせより、半刻。

麻姫を殺害した和姫の拘束と、緊急議会の指示を出し、帝は上機嫌で糸桐と向き合っていた。

「和姫が麻姫を殺したか……。何を勘違いしたのか」

くつくつと笑う帝に、糸切りが呆れ顔で返す。

「麻姫に籠をかける、と思ったのでしょうか。同格の家の出でありながら、麻姫は皇族の血など引かぬ身。直系の末裔であるという自尊心を持つ和姫には納得いかなかったのでしょうか」

「愚かな……。皇族の血などといっても、もはや薄れすぎて何の効力も持たぬわ。それに縋るしかない家になど、用は無い」

数多くの家に、皇族の血は入っている。

特定の家以降嫁させて、権力が集中するのを防ぐ目的もあるが、多すぎる皇姫の嫁ぎ先に困った、という理由が大きい。

そのため、和姫の実家や朝姫の実家程度の家など、無くなったところで大した損害は無い。

「初めは静姫だったか……。あれも、芙蓉に手さえ出さなければ、それなりの地位には居れたものを……。次は、二条の方……。余の子を産んだにもかかわらず、愚かな女よ……。そして、和姫、か」

寵姫で在り続けることを望み、帝妃に刃を向けた静姫。拘束し、投獄した後、気が触れて自ら命を絶った。

立后を望んだ正室は、帝妃を呪うという暴挙に出た。都一の正貴族である実家の権力をも凌駕する帝妃の身を呪った愚かさで、その身は罪人として一族諸共流刑された。

そして、今回。

不用の女たちの下げ渡しのために布令を出した奥泊まり。

まずは、と指定した麻姫を、寵を与えられると勘違いした和姫が殺害した。

「これで三度目やな。下げ渡しなど行わず、奥殿解散を行う理由としては充分と違うか？」

奥殿に入内している女たちの実家のことを考え、なるべく穏便に済ませようとした結果の下げ渡し。

しかし、それを行う前に起こったこの騒動に、もはや氣遣う必要は無いのではないか、と帝は言う。

「それでも、強行に事を進めれば角も立ちましょう。いくら帝不通信が続いているとはいえ、まだまだ可能性を捨てていない者も多く居るようですし・・・」

入内しているのは、ほとんど朝議に参加できる身分の家の姫。

強行に事を進めては、反発が強いだろう。

第一、奥殿の女たちは、帝の寵を諦めてはいない。

一度でもお手がつけば、後はどうとでも、という考えを持つ女たちも少なくは無い。

「芙蓉以外は抱かぬ……。いつそのこと、夕木の方と椿も東殿に移して、奥殿を封鎖させるか……」

本気を滲ませた帝の言葉に、糸桐はただ苦笑するしかなかった。

奥殿 紅の間

騒然とする奥殿の空気に、夕木の方は水波を呼び出していた。水波の到着を待つ間に、新たな衝撃が奥殿を襲った。

「では、麻姫様を和姫様が……？」

「はい。駆けつけた時には、既に麻姫様は息絶えておられました。傍らには、懐刀を手にした和姫様。うわ言のように何かを呟かれ、もはや正気とは……」

本日の奥泊まりの真偽を聞くために呼び出した水波から聞かされたのは、にわかには信じがたいものだった。

帝の女たちの住まう、奥殿と言うある種特殊な空間で起きた、惨劇。

側室と言う身分の女が犯した、惨事。

「……本日の奥泊まりの布令と、何ぞ関係が……？」

穏やかとはいえないながらも、表立った問題は無かった奥殿で。このような事態の切欠など、考えるまでもない。

「はい。和姫様は、うわ言のように『下賤の血』と呟いておいでした。麻姫様が帝の寵を受けるのが・・・」

「気に入らなかった、と？　確か、和姫様も皇族の血を頂いていらっしゃるのか・・・」

都貴族とは名ばかりの、何の権力も持たない家。

しかし、和姫が帝の寵を頂きお方様となれば、それは一変する。

実家は皇家と縁続きとなり、発言権もあがり、権力をその手中に収めることも夢ではなくなる。

「しかし、このような事態を引き起こしたとなれば、御家も・・・」
「無事ではないでしょうね・・・。しかし、なぜ帝は本日奥泊まりを？」

帝妃芙蓉の方しかいらぬ、と明言している帝。

それを裏付けるように、奥殿へ足を踏み入れることもしなかった。
それが、何故、と水波に疑問を投げかける。

「わかりませぬ。本日、糸桐殿から聞かされるまで、帝からは何も・・・」

「出された時刻も、夕餉の直前・・・。何か、急を要する事でも？」

通常、帝の奥泊まりは、午前中に出されるのが慣例である。

奥殿中の女の用意を整えるのに必要な時間を考慮した結果であり、帝自身の予定を組むのに必要な時間でもある。

それが、今回は遅すぎる。

思い立ったように出された知らせ。

それも、布令ではなく、糸桐の伝言と言う形で知らされた、それ。

「帝のお考えはわかりませぬが……。糸桐殿は、数日通うことになるだろう、と」

水波の言葉に、夕木の方は目を剥いた。

「数日？ 何故それほど通う必要が？ ……政的判断とも思えぬ・・」

取るに足らない家。

要職に就いているわけでもない、今更、何の足しにもならぬ実家。逆に、今更帝が寵を与えれば、権力の均等が崩れる。

「芙蓉の御方様はご存知か……水波、帝妃様に文を届けておくれ」

奥殿の頂点に立つ正室は、国母である帝妃に、指示を仰ぐ。

式拾伍 朧月夜の逢瀬

東殿 白雪の間

鬼彗の腕の中でまどろむ蓮姫。

久方ぶりの逢瀬を経て、穏やかに過ぎす至福の時間。

しかし、それは長くは続かない。

「姉上、そろそろ戻ります」

ゆっくりと流れる時間に終止符を打つ、鬼彗の声に。

その腕に囲われる蓮姫は、ゆっくりと離れる。

「影のこともございます。くれぐれも、御身お気をつけください」

「ええ。あれは、大丈夫・・・わたくしに、危険はありません」

鬼彗の言葉に、くすくすと笑う蓮姫。

艶やかな、その声に。

鬼彗の警鐘が、鳴る。

「まさか・・・」

ゆっくりと、己の腕の中から出ていく蓮姫に。

鬼彗は、物言いたげに、視線を合わせる。

「大丈夫・・・。影は、鬼彗の影」

身に纏う、紅の打ち掛け。
鮮やかなその色は、蓮姫の、貴色。
己の力を隠すための、色。

「あれは、あまりにも浅はか。影ごときが、わたくしにかなうものではないと知りながら、手を出す・・・」

ただの愚か者だと、蓮姫は笑う。
しかし・・・

「それでも、私の力は影には及びません。当代と同種の力と、同等の強さは、嘘ではないでしょう」

忌々しいが、と言う鬼彗。

それを見て、蓮姫は、ただ、笑う。

「九鬼は何と？」

本来ならば、知られざる存在。
本来ならば、隠されるべき、影。
表に出ることさえ叶わぬ、鬼家の、闇。

「・・・確認はとらせておりません。もし、九鬼が知らぬのならば、それは・・・」

「九鬼の手に負える問題ではない、か？ 九鬼は知らぬでしょう。
わざわざ百合に、式をおいた、などと言ったそうです」

それに、今も何の手だても打っていないとは、考えられない、と
蓮姫は言う。

いくら、鬼彗には報告できずとも、蓮姫には報告があるはずなの

だ。

それが、蓮姫の立ち位置。
それが、鬼頭の姉姫。

「では、このまま・・・？」

鬼彗の目に浮かぶのは、不快。

「影を排除することはできません。あれは、鬼彗の影。鬼彗の式切」

大切なのは、その存在意義のみ。
その身に受ける、邪の呪い。

「それでは・・・！！」

望まれているのは、自分の至宝。
差し出せるわけがない、と憤る。

しかし。

「わたくしは、鬼頭の姉姫。この世の理の具現者にして体現者。そうでなければならぬ身です」

発せられるのは、力の塊。
言葉に乗せる、言霊の呪。

何人も縛る事のできない、強い力。
蓮姫にのみ許された、正法。

「私は、ただの管理者。姉上の力に、干渉する権利を持たぬ身」

だから、心配なのだと。

だから、安心できないのだと。

鬼彗は、言う。

「まだ、狂うてはおりません。まだ、歪んではおりません。非干渉は、影とて同じ」

だから、大丈夫だと。

だから、心配ないのだと。

蓮姫は、そう言い、微笑む。

これ以上の問答は不要だと、鬼彗から完全に離れる。

「わかりました……。しかし、これだけはお約束を。蓮華は、私の、唯一の妻である、と」

強く、強く縛られるその言葉に。

「鬼彗は、唯一のわたくしの夫です」

淡い緋の力が、絡まった。

「姫様、夕木の方より書状でございます」

鬼彗が戻って数分。

部屋を覆っていた特殊な結界が消えたのを確認し、百合が書状を片手に入ってくる。

「帝の奥泊まりの件ですやろ・・・」

まだ収まらない奥殿の騒ぎを横目に、書状を受け取る蓮姫。

「ほう・・・奥居頭も、此度の事、知らなんだそうですね」

「それは奇なことですね。そもそも、知らせを受けるんは奥居頭でしょうに」

夕木の方の書状に記された内容に、蓮姫は楽しげに言う。

「あの影の仕業ですやろなあ。理を狂わせるのが目的か。駒を作るのが目的か・・・」

どちらにせよ、その思惑は、叶わなかったのだろうが。

「まだまだ、時間はある・・・もう少し、影とも遊びましょうかえ」

くすりと笑って、筆を取り。

「望み通り、次の一手はわたくしから・・・」

楽しげに、珍しい玩具を、弄る。

「姫様・・・御当代様に、叱られてしまいますえ？」

百合の窘める声も、どこか楽しげに響き。

「何の問題もありません。ゆっくりと、楽しませてもらいましょ
う」

理という広大な舞台で舞う、影という道化と。

歪劇と狂劇を。

式拾陸 綺羅う色

表殿 朝見の間

奥殿の騒ぎより翌々日。

立ち入りを禁止されていた帝殿は、やっと落ち着きを取り戻した。通常通りに始まった朝見。

その話題は、やはり奥殿での惨劇。

「みなも既に知っておろう。先日、奥殿にて和姫が麻姫を殺害した。一度も寵を与えなんだ姫なれど、奥殿に迎えたからには予の庇護下守れなんだ非は予にある」

朗々と話す帝に、参加した貴族たちは言葉もなく。

今まで、帝がこのような事を言葉にしたことはなかった。

望んで迎えた姫など芙蓉の方以外にはおらず、寵を与えた姫すら片手で足りる。

そんな奥殿事情の中、帝の言葉はこれまでの均衡を覆すものであり。

また、信じられるものでもなかった。

今回のことをきっかけに、帝は奥殿を視野に入れた、と誰もが期待した。

これからは、奥殿が正常に機能するのではないか、と。

しかし。

「このまま奥殿を存続させるのは困難。もともと、予は芙蓉以外は

いらぬ。よって・・・」

一切の迷いもない帝の言葉は。
緋色の粒子を纏って発せられた。

「入内者を解放し、奥殿を閉鎖させる。期限は三日。速やかに退去し、閉鎖させよ。否は聞かぬ」

勅令。

覆されることのない、絶対的な言葉。
相談さえされることの無かったそれに、誰一人として声を発することは出来ない。

「夕木の方と椿姫は東殿にその身を移す。詳しくは追って知らせる」

以上、と言いきり、退席する帝。

残された者たちは、呆然と帝を見送り。

静まりかえった場には、一切の流れが消えていた。

「まさか、こうくるとは・・・」

このような手を打たれるとは思わなかった、と言う糸桐の言葉も、
流れることは無く。

「当代の力は、あの方には及ばぬのか・・・？」

さすがはわが至上、と蕩けるようなその顔で。

「だからこそ、求めずにはいられないのです・・・」

帝を追うために立ち上がった糸桐の独り言は、静寂に溶けた。

東殿 白雪の間

「姫様、一体何をされましたのや？」

機嫌の良い蓮姫に、牡丹が聞く。

「今朝がた出ていった帝が、姫様の力の欠片をまっと取りましたが・
・」

それと何か関係が？ と百合がいう。

「影の用意した舞台に、ほんの少し色を添えただけのことや」

くすくすと楽しげに笑う蓮姫。

次の一手を、蓮姫から打ったという。

「まあ。どんな色です？」

「姫様御自ら手を加えられるとは・・・」

呆れたように、しかし楽しげに言う牡丹と百合に、蓮姫は笑みを深める。

「影のオイタを潰したまで・・・。奥殿の解散と閉鎖を望んだだけ

や」

「帝は、そのつもりだったのじゃないですか？」

ふふ、と笑う蓮姫に百合は言う。

「帝は、な。あの影の真意は別ですよ。傀儡となる身が欲しかった。その身に何としてでも子が欲しかった」

理に綻びを入れることが目的のようですね、と蓮姫は笑う。
無駄なことや、と言う蓮姫に、百合も牡丹も言葉は無い。

「この世の理に干渉することは、たとえば鬼彗でもできはせぬ。たかが影には重かろうて」

鈴の音のような蓮姫の声は、緋色の粒子を纏い、消える。
輝くそれは、蓮姫の力。何人にも犯されぬ、純粹な力。

「あの影は、勘違いをしとりますなあ。鬼頭家の当代は、ただの管理_リ者にして守_ホ護_ゴ者_リに過_ヒぎ_ヌぬ」

ゆらり、と蓮姫の身から立ち昇る、緋色の力。

「理の具現者は、体現者は、このわたくし。理に干_カ渉_セすることは、わたくしに干_カ渉_セする、ということ」

蓮姫から溢れた緋色は、消えることなく広がる。

「影は所詮、影。隠され続けたその身は、真理を知らぬ。わたくしがどのような立場か知りもせぬ」

包むように広がった緋色の中で、蓮姫は美しく微笑んだ。

「一切の干渉を拒み、ただ理のみをこの身に移す、わたくし。その意味を、影は知らぬ」

ぱちん、と蓮姫が扇を閉じれば、一瞬にして四散する、緋色。

消えた緋色は、蓮姫の、力。

撒かれた力は、蓮姫の、言霊。

表殿 政務の間

朝見の間を後にした帝を追いかけ、政務の間に入ろうとした糸桐は。

一瞬にして放たれた緋色に、その歩みを止めた。

「あの貴女^{かた}の・・・」

輝く緋色は、至上の貴色。

まごう事無き、至宝のイロ。

「込められているのは・・・？」

真意を見抜こうと、目を凝らすが。

「・・・あれ、は・・・？」

そこにあるのは、悪意の無い力。

「私に、あてられたものではない、と・・・？」

信じられぬ、と呟いて。

「干渉が、できない・・・？」

向けた力は、全てが消えた。

「ばかな・・・」

当代と同種にして同等の力は、

「如何なる力よりも勝っているはず・・・」

なのに、なぜ、と言う影は。

東殿に、その視線を、向ける。

「まだ、力が足らぬの、か・・・？」

呆然と呟く糸桐の言葉は。

漂う緋色に、消えた。

真理を知らぬ道化の影は。

理
と
い
う
広
大
な
舞
台
で
。

愚
か
な
舞
を
、
舞
い
続
け
る
。

式拾漆 咲き匂う人

九鬼家 当主の間

今朝方もたらされた一通の書状に。

九鬼家当主九景の顔色が無くなった。

「まさか・・・」

信じられない、とは口にできない。

この方の言葉を、否定することなど許されてはいない。

「確認は、不要・・・」

せめてこの目で確認を、と立ち上がりかけるも、それすら続く文面で止められる。

「一体、何が・・・」

知ることの許されない事態に。

己の役割すら全うさせてもらえない現実。

ただ、うなだれる。

「姉姫様の御身こそが世の至宝・・・」

今更な真理に。

たった一つの理に。

縋りつくより、道はない。

「我等が身は総じて鬼頭の血。あの者として同じこと」

いや、あの者こそがその純血。

なのに、何故、と疑問がすぎる。

「血に、呑まれたか・・・」

強すぎる力は、濃すぎる血の証。

逃れられぬ血統だからこそ、求められる強い意志。

光か影か。

誕生せし瞬間に決まる、その立ち位置。

己を律し、その力を制御する者こそが、光の中に。

ただ力を解放し、母体を傷つける者が、影に堕ちる。

「愚かな・・・」

影として、何も知らぬはずの彼の者は。

ただ、純粹に望んだのだろう。

我らの至上を。

この世の至宝を。

「理への干渉は出来ぬ。しかし・・・」

光に取って代わることは、可能なのだ。

その身は、影。同等にして、同種。

光と同じ存在。

「どこまでを望む・・・？」

同じ存在だからこそ、望む者も、また、同じ。
ならば・・・

「御当代様に、頑張っていたかくほか、ない・・・」

決して崩れぬ理の。

支えとなるべき、その存在に。

宗家 星占の間

青白く輝く力の渦に。

その中央に座す鬼彗が反応した。

「この力は、姉上の・・・」

己の力の中に、紛れ込むのは蓮姫の力。
緋色に輝く、理の力。

「静観を、と申し上げたのに」

出来れば、何事もしてほしくは無かった、と。
放たれた力を追い、溜息を吐く。

「影ごときに・・・」

忌々しい、と思うが。

「止められぬのも、また事実」

この世の全ては、蓮姫の物。

理の体現者は、具現者は、蓮姫ただ一人。

「その身が神だと、なぜ気付かぬ」

古の血。

永き歴史の中に埋もれた、真実。

鬼家は、世の理を管理する一族。

世の理とは、この世の筋道。

森羅万象の道理にして揺らぐことのない道。

それを体現できる者など。

それを具現できる者など。

ただ人で、あるはずがない。

「影ごときが、神を望むか・・・」

愚か者だと、嘲笑うが。

「同じ存在であるからこそ、理解もできる・・・」

もしかしたら、己だったかもしれない半身。

同じ時に産まれた、もう一人の自分。

この世でたった一人の、兄弟。

奥殿 紅の間

「まあ、では、夕木の方様と椿姫様も東殿へ？」

「帝と帝妃様と同じ居住とはなんと喜ばしい」

もたらされた勅令にわく紅の間。

帝の住居である東殿への立ち入りは、極限られた者しか許可されず。

本来であれば、そこに住まうことは叶わない。

「奥殿を閉鎖するゆえ、東殿へ、とのお達しにございます」

夕木の方へ勅令を届けにきた水波も、一緒に東殿へ移るという。

「しかし、女官は二人とは……。お方様にご不便をおかけするわけには……」

「帝妃芙蓉の方様の女官も二人。私がそれ以上連れてゆくことは出来ないでしょう」

東殿へ移るにあたって出された、唯一ともいえる条件が、同行の女官は二人にすることであった。

難色を示した女官たちとは反対に、当の夕木の方は当然だと笑う。

「水波も一緒だと言うし、心配は無い。それよりも、早く支度をしてしまいなさい」

与えられた期限は三日だが、それより早く片づけたいと。せかすように言い募る夕木の方に、女官たちはその場を離れる。

「まさか、奥殿を閉鎖されるとは思いませんでした」

「静姫様にはじまり、二条の方、和姫様……。不浄となった奥殿に用はない、と」

もともと、その必要性を感じてなどいなかった帝だからこそその決断だが。

「世が荒れねば良いが・・・」

未だかつて無い決断だからこそ不安はある。

しかし。

「鬼家の方々との縁がございますし、心配はご無用かと」

今生帝の帝妃となったのは、宗家の姉姫なのだから。

東殿 白雪の間

「夕木の方様のお部屋は、どこにご用意いたしましょう？」

夕木の方の移住に伴い、東殿の管理一切を取り仕切る沢谷の局が問う。

白陽帝は乳母であった沢谷の局しか使っていないが、普通であれ

ば数十人の女官を使う帝の居住である東殿には、使っていない部屋がごまんとある。

「浅黄の間でも与えよ。あそこなら広く使い勝手も良い」

答える帝は機嫌良く、太子を抱いてあやしている。

「夕木の方様や椿姫様と一緒に嬉しゅうございます」

ここで話し相手が出来るのは嬉しいと、蓮姫の機嫌も良く。笑う愛妻の様子に、帝は自らの決定に満足する。

「芙蓉がこれほど喜ぶのなら、もっと早うに解散させれば良かったな」

そうすれば、このような面倒も無かったと、語る帝は気付かない。

「何事も、時期が大切なのですわ」

己の判断が、何時如何なる判断であったのか。どんな思惑があったのか。

「時期、か・・・」

奥殿解散などという、前代未聞の大事の決定。その時のことを、思い出せないでいることを。帝が気付く、ことはない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6190j/>

文目も知らぬ恋

2011年11月26日17時46分発行